オイディプスの呪い

── 叙事詩と悲劇 ──

小　川　正　廣

〈岡道男先生の霊に捧げる〉

はじめに
1．悲劇以前の伝承
A．ホメロス
B．『テーバイス』
C．ステシコロス，ヘッラニコス，ヘシオドス
D．「宿命の子」の民話の発展──ユダの物語の場合
E．呪い，運命，籤
2．アイスキュロス『テーバイを攻める七人の将軍』
A．呪いについての言及
B．オイディプスの呪いの原因
C．呪いの内容
D．アイスキュロスの革新
E．呪いの成就
3．エウリピデス『ポイニッサイ』
4．ソポクレス『コロノスのオイディプス』
A．神託と呪い(1)　オイディプスとテーバイ人
B．神託と呪い(2)　オイディプスとポリュネイケス
C．結び

はじめに

デルポイのアポロンの神託によって自分の子供に殺されると告げられたテーバイの王ライオスは，生まれた赤子を山に捨てた。しかし赤子は助けられ，オイディプスと名づけれてコリントスの王の子として育てられる。オイディプスは，成人したのち神の予言どおりに父ライオスを殺し，さらにその妃で実母のイオカステの夫となる。そして多くの伝承によると，その後オイディプスは，自分が犯した二つの罪を知ったあと，エテオクレスとポリュネイケスという二人の息子に対して恐ろしい呪いをかけたと言われている。オイディプスのその呪いは，やがて息子たちをテー

バイの王位をめぐる戦争に駆り立てた。いわゆる第一次テーバイ戦争の勃発である。エテオクレスはテーバイを守り，ポリュネイケスはアルゴス軍とともにテーバイを攻める。だが，結局二人はその戦争で相討ちして果てた。こうして，テーバイ王家の三代にわたる忌まわしい運命が完結する。

悲劇作家アイスキュロスは，前467年にこのテーバイ王家をめぐる物語を題材にした三部作をアテナイで上演した。それは『ライオス』『オイディプス』『テーバイを攻める七人の将軍』からなるが，現存するのはそのうちの第三部のみである。その後同じくアテナイの悲劇作家エウリピデスが，『ポイニッサイ』という劇でオイディプスの呪いに起因する息子たちの争いと破滅を描いた（前411～409年頃上演)。一方ソポクレスもまた，同じ主題を取り上げて二つの悲劇作品を残した。『オイディプス王』は，主人公がライオス殺しとイオカステとの結婚の事実を発見するまでの経緯を語っており，その創作年代はアイスキュロスの三部作以後，エウリピデスの『ポイニッサイ』より以前の前441～432年頃と推定される。他方『コロノスのオイディプス』は，オイディプスの呪いと死の直前の状況を詳しく描いた作品である。その上演年代は，『ポイニッサイ』の上演以後で，前406年頃の作者の死後，前401年とされる。

このようにオイディプスとテーバイ王家の運命についての神話は三大悲劇作家が競って取り上げた題材であるが，しかし全体的な物語展開のうえで，ソポクレスの構想にはアイスキュロスとエウリピデスの作品の場合とはいくつかの異なる点がある。その一つは，前稿[1]で考察したように，『オイディプス王』において主人公自身が親に対する罪に関して神から直接予言を受けることであろう。そしてもう一つの重要な相違は，オイディプスの真実発見後の出来事を扱った『コロノスのオイディプス』に認められる。

『コロノスのオイディプス』では，老いた主人公は長い放浪の末，アッティカ地方のコロノスに到着し，その地に祀られたエウメニデスの神域で死を迎えることを悟る。それは，かつてアポロンからそのような神託を受けていたことを思い出したからであった。するとやがてテーバイからクレオンが訪れ，やはり神託のゆえにオイディプスをむりやり連れ去ろうとし，その試みは失敗する。次にオイディプスの息子ポリュネイケスが来て，同じく神託を聞いたため父親を味方に引き入れようとする。だが，そのときオイディプスは嘆願を拒否し，息子たちが互いに殺し合うようにと激しく呪う。この呪いの直後，オイディプスは女神の神域の中に姿を消すのである。

この粗筋からも明らかなように，ソポクレスはオイディプスの息子たちの破滅の決定とオイディプス自身の死とを密接に結びつけようとした。アイスキュロスの『テーバイを攻める七人の将軍』では，エテオクレスとポリュネイケスの戦いの開始はオイディプスの死後のこととして語られている[2]。またエウリピデスの『ポイニッサイ』では，オイディプスは息子たちの死後まで生き残って，一族の破滅のあとに，自分は放浪に出てコロノスで死ぬだろうと語っている。いずれの場合も，オイディプスの死は息子たちの破滅の決定とは直接的な関係はなく，息子たちに呪いを発したあとオイディプスがいつどこで死ぬかは，戦争の結末に左右されたり，あるいはそれに影

響を与える話題ではなかったようである。それに対して『コロノスのオイディプス』では，息子たちの破滅の決定とオイディプスの死期の訪れとは，互いに関連し合いながら，ほぼ同時に舞台上で進行している。つまりオイディプスがまさに今コロノスで死ぬという状況は，クレオンやポリュネイケスらの運命の決定と平行して準備されていくのである。

元来独立的でとくに深い因果関係のなかった最初のテーバイ戦争の結末とオイディプスの死という二つの話題は，このように『コロノスのオイディプス』において一つの時間と空間の中に一体化されている。そのような神話上異例の組み合わせを実現するために，ソポクレスはオイディプスの呪いという従来のモチーフを独自な方法で用いている。『テーバイを攻める七人の将軍』と『ポイニッサイ』におけるオイディプスの呪いは，前述のようにテーバイ戦争の発生の原因として語られており，それは戦争勃発以前の出来事とされている。しかしソポクレスでは，オイディプスは息子たちの争いがすでに始まったあとの段階で呪いを発しているのである[3]。もちろんソポクレスのオイディプスの呪いは，息子たちの破滅を決定づける重要な要素である点では従来の伝承と変わりはない。だが，それは戦争という危機的状況の発生それ自体とは切り離されており[4]，戦争勃発以後のオイディプスの死の時期と時間的に重なるように設定されている。

さらに上述の異例の組み合わせを可能にしたもう一つの要素は，神託であろう。『コロノスのオイディプス』の初めの場面で，オイディプス自身が自己の死に関する神託を語り，またその後テーバイ人クレオンと息子ポリュネイケスにも神託が下ったことが明らかにされる。それらの神託は同じデルポイのアポロンによるものであり，同じ結末を予告しているが，一方では主人公の態度を決定づけ，他方ではクレオンとポリュネイケスの行動を促して，両者の対決へと導く。劇全体は，この二つ――でありながら同一――の神託に端を発する双方の意志と行為がぶつかり合った結果，オイディプスの死とテーバイ王家の滅亡へと収斂していくのである。そのように複数の神託が登場人物に下り，彼らの思惑が交錯して一定の結末が生じるという展開は，上述のアイスキュロスとエウリピデスの作品には見られない。『コロノスのオイディプス』では，神託はテーバイ戦争とオイディプスの死という二つの独立的話題を結合する中軸の役目を果たしている。

さて『コロノスのオイディプス』に関するこれまでの研究では，父に嘆願する息子に対するオイディプスの呪い自体の倫理的妥当性や，その一見不可解な恐るべき呪いとエウメニデスの神域における死との関連がしばしばに論じられ[5]，古い伝承や先行作品との比較から浮かび上がってくる上述の劇構造の特殊性には，十分な注意が払われてこなかったように思われる[6]。たしかにこの作品のオイディプスの呪いは，倫理的観点からの検討を必要とするだろう。またその呪いに凝縮された古代ギリシア人の人間観が，オイディプスの死後の英雄化[7]の背景にあることは疑うことができないであろう。だが，その主人公の呪いが，二つの神託をめぐって展開するこの劇固有のダイナミックな進行の中に効果的にはめ込まれ，オイディプスとテーバイ王家の神話に関するソポクレスの新たな創作の重要な布石になっていることも見落とすことができない。そこで本稿ではまず，オイディプスの呪いが，従来の伝承や先行作品でいかなる役割を果たしていたか

を検討する。そのあと『コロノスのオイディプス』のオイディプスの呪いについて，作品全体の構想に配慮しながらその性格と意義を考察してみたい。従来の伝承で呪いは，オイディプス一族の運命を決定するものとして神託や予言に類した役割を果たしていた。したがってそれを検討することは，当然ながら『コロノスのオイディプス』における神託の性格の理解にもつながってくるであろう。

1．悲劇以前の伝承

A．ホメロス

真実が発覚したあとのオイディプスとテーバイ王家の運命を示す最古の文献は，ホメロスの叙事詩である。『オデュッセイア』第11巻271-280では，父を殺したオイディプスは母エピカステを妻としたが，神々はその事実をたちまちに人々に知らしめ，エピカステは自殺したと語られている。一方オイディプスは，「呪わしい神意にしたがって，苦難を味わいながらカドモスの民を支配し」続けたが，母親の怨霊（エリニュス）がもたらす「あらゆる大きな苦しみ」をこうむったと言われる[8]。

「冥界降り」のこの一節には，オイディプスの子供についても彼の呪いに関しても言及されていない。ただ呪いについては，オイディプスが「母親のエリニュス」ゆえに苦悩を経験したと語られることから，母エピカステが真相を知って夫となった息子に対して何らかの呪いをかけたと想定できる[9]。もし母が呪いをかけたのなら，そのためにオイディプスはどのような「苦しみ」をこうむったのであろうか。『イリアス』第23巻679-680によれば，その後王として君臨し続けたオイディプスは「戦場に倒れ」，テーバイで葬られたと伝えられるから，のちの悲劇で語られるように自分の目をつぶすという苦難の行為は行なわなかったと思われるし，また国から追放されて放浪の旅に出ることもなかったであろう[10]。さらに『イリアス』第4巻376-399では，オイディプスの息子エテオクレスとポリュネイケスに言及され，彼らが相争ってテーバイ戦争が起こったことが示される。しかしその戦争で死んだアルゴス方のメキステウスなる英雄が，上述の『イリアス』第23巻679-680ではテーバイでのオイディプスの葬礼競技に参加したと言われるので，テーバイ戦争はオイディプスの死後に始まったと考えられており，したがってオイディプスが生存中に息子たちの武力闘争ゆえに苦しむことはなかったはずである[11]。母の呪いゆえのオイディプスの苦悩の理由は，おそらく母との近親相姦で生まれた子供たちの存在そのものだったのではないだろうか。

パウサニアス（9.5.10-11）は，上述の『オデュッセイア』第11巻の一節では母との結婚の事実は神々によって「たちまち」明らかにされたと述べられるので，エピカステとオイディプスの間には子供は生まれなかったと主張している。そしてパウサニアスはその証拠として，オイディプスがエウリュガネイアという女性との間に子供たちをもうけたと明言している叙事詩の環の『オイディポデイア』を挙げている。しかしパウサニアスが論拠としている「たちまち」という言葉

aphar (274) は,「ただちに」という意味のみならず「突然に」という意にも解することができる[12]。ホメロスの知っていた伝承では，オイディプスはやはり母から子供をもうけ[13]，その子供たちの存在によって母子相姦の罪に苦しむ人物として語られていたのであろう。それが，母の呪いのもたらした苦悩の理由であったと考えられる。

B.『テーバイス』

『オイディポデイア』の作者がオイディプスの子供の誕生を母との結婚ではなくエウリュガネイアとの再婚によるものとし，ホメロスの示す伝承とは異なる話形を伝えたのだとすれば，叙事詩の環の『テーバイス』にもまた，ホメロスの伝承とは少し食い違う内容のオイディプスに関する話が語られていた。そしてその逸話の中には，オイディプスの呪いについての最古の言及が認められる。

まず『テーバイス』断片(2)には，次のような呪いに関する二つの場面が語られている。

> ポリュネイケスはオイディプスのそばに，父祖カドモスの美しい銀の食卓を置いた。次にポリュネイケスは，金の杯に酒をたっぷりと注いだ。しかしオイディプスは，父の貴重な贈り物がそばにあるのに気づいてたいそう気分を害し，ただちに二人の息子の前で激しい呪いを放つと，神々のエリニュスはそれを聞いた。オイディプスは，息子らが仲良く父の遺産を分け合わず，たえず戦い争い合うようにと祈ったのだ。　　(アテナイオス，11.465E)

また『テーバイス』断片(3)には，もう一つの呪いの場面が描かれている。

> (エテオクレスとポリュネイケスはいつも父オイディプスに，犠牲獣の肩肉を届けていたが，あるときうっかり忘れて腰肉を届けさせた。)　オイディプスは腰肉に気づくと，それを地面に投げつけて言った,「ああ，息子らがわたしを侮辱してこれを届けた」と。そしてオイディプスは王なるゼウスと他の神々に，彼らが互いの手で殺し合ってハデスに下るようにと祈った。　　(『コロノスのオイディプス』1375の古注)

上の断片(2)では，オイディプスが王家の財産である銀の食卓と金の杯に「気づいた」(phrasthe) とあり，また断片(3)では，彼は腰肉に「気づいた」(enoese) と言われる。そのことから，彼がすでに失明していたと想像することもできるが，しかし確実にそう断定することはできない[14]。他方この両場面の状況として，オイディプスがすでに王位を退いていたと判断してもよいであろう。もしも彼がまだ王であるなら，自分を憤慨させ侮辱した息子らに対して，呪いという間接的方法には頼らずに，直接自己の権威を用いて容易に罰を加えることができたと思われるからである[15]。オイディプスが王でなくなった事情は不明だが，『テーバイス』のこの伝

承は，王として戦死したことを示すホメロスの伝承とは異なっている。

さらに『テーバイス』の断片は，オイディプスの呪いの動機を語っている点で興味深い。断片(2)によると，オイディプスはポリュネイケスがテーバイ王家の財産で父の「貴重な贈り物」(timeenta gera) をそばに置いたので立腹する。息子が王家の貴重な財産を自由に用いることが，王位を退いた老人には不満だったのであろう[16]。とすれば，オイディプスは円満に退位したのではなく，息子（たち）によって不本意に王の地位から退けられ，そのために彼（ら）を憎んでいたと考えられる。そしてこの断片では，オイディプスの呪いの言葉自体が，王権をめぐって対立する子供たちに対する怒りが呪いの原因であることを示している。すなわち「息子らが仲良く父の遺産を分け合わず，たえず戦い争い合うように」という彼の祈りは，王権を渇望して父親の権威を蔑ろにする子供らに対する復讐の呪いである。

一方断片(3)には，異なる呪いの原因が示される。そこでは，犠牲獣の肩肉でなくより劣った腰肉を父に届けたことから，二人の息子が呪われる。この断片を引用した上記の古注では，このオイディプスの呪いは「狭量でまったく高貴さを欠く」行為だと批判されている。だがこの断片の叙述は，彼のもう一つの呪いが，王権とは別の理由で発せられたことを簡潔かつ象徴的に表現している点で注目に値する。それは，老いた親として子から十分な扶養を得られないことへの不満，子供が親の生活の世話をしっかりと行なわないことに対する憤懣である。

『テーバイス』は，オイディプスの息子たちの争いから始まったテーバイ戦争の物語である。その物語には，当然エテオクレスとポリュネイケスの相討ちの話が語られていたであろう。上述の呪いに関する断片のうち，(2)は戦争の勃発を前触れし，(3)は兄弟が殺し合うという不吉な結末を予告している。そうした呪いの結果，二人の兄弟の間の権力争いが具体的にどのような原因で起こり，またどのようにしてテーバイにアルゴス軍が攻め寄せるにいたったのかは，現存の他の断片から推測することはまったく不可能である。また呪いに関連してもう一つ不明な点は，『テーバイス』ではエテオクレスとポリュネイケスの母が誰であったのかということである。しかしこの点については，パウサニアスの上述の記述が貴重な示唆を与えている。すなわち『オイディポデイア』では，オイディプスはエウリュガネイアと再婚して子供をもうけたと語られていた。それゆえ『テーバイス』でも，彼らがエウリュガネイアの子と述べられていたか，あるいはそれを前提にしていた可能性は十分考えられる[17]。

前述のように，ホメロスではオイディプス自身の呪いは語られないが，彼の母エピカステの呪いについては触れられていた。彼女の呪いは，おそらく息子との間に誕生した子供らゆえのものであろう。だがその後の叙事詩の環では，オイディプスは再婚後に子供を持つことになったと推測される。その理由として考えられるのは，叙事詩の環がオイディプスの生涯からテーバイ戦争にいたるテーバイ王家の神話全体を視野に入れて作成されたことである。『オイディポデイア』と『テーバイス』の作者たちは，オイディプスの人生とテーバイ戦争をもたらす彼の息子たちの争いとが何らかの明確な因果関係で結びついた物語展開を念頭に置いて創作に取り組んだであろ

う。そのとき，二つの世代の出来事をつなぐ要素として注目されたのが，息子らへのオイディプスの呪いであった。そしてその呪いは当然，戦争の性質とその結末を予期させるものでなくてはならなかったであろう。もしもオイディプスの呪いが，エピカステの呪いのようにたんに子供という母子相姦の産物に由来し，その忌まわしい系譜を根絶したいという欲求から発せられたのならば，その後の第一次テーバイ戦争の発生から終息（兄弟の死）までの成り行きを予想させるのは難しい。子孫の絶滅への願望は，たしかに相討ちによる息子たちの死という結果を漠然と期待させることはできても，しかしそもそもなぜ他国を巻き込む規模の戦争が起こらねばならないのかを説明するには不十分であろう。むしろオイディプスの息子たちは，王権への欲望と扶養義務に関する怠慢のために父の呪いをこうむり，苛烈な権力闘争と一族の自滅へとみずから進んで行ったとする方が，オイディプスの生涯からテーバイ戦争へと推移するコンテクストを見通すかぎりより自然で合理的な見方である。

ホメロスの知っていたテーバイ王家に関する伝承において，オイディプスの呪いが語られていたかどうかは不明である（おそらく，それが語られた伝承は古くから存在しただろう）。しかし以上のように筆者は，叙事詩の環の時代に神話の体系化が進み，テーバイ神話に関しても諸部分の整合性が問われたとき，血縁間の不自然な関係とそうした罪に汚れた王家の滅亡というモチーフは後退せざるをえなかったであろうと考える。その段階で，話題を接合する役割を果たす「オイディプスの呪い」が叙事詩的文脈に適合した内容を備えて現われるとともに，オイディプスの息子たちはじつは彼の母親からではなく，再婚の結果生まれたものと見なされたのであろう。オイディプス王は新しい女性を妃に迎え，いわば第二の人生を歩みだす。やがて息子たちが誕生し，大人に成長する。しかしその後この二人の息子は，父を退位させ，王の後継者の地位をめぐって争うことになり，テーバイに戦争が起こる。だが，その破局は――忌まわしい血縁の罪のためではなく――，じつは子供ら自身の過ちが招いた父の恐ろしい呪いのゆえにもたらされたのであった。『テーバイス』は，おおむねこのような筋書きで語り始められたと想像できよう。

ところで以上の『テーバイス』の構想では，近親相姦のモチーフを排除した結果，呪いはより物語展開に沿った役割を果たしてはいるが，他方息子たちの罪と彼らへの呪いの関係に再び目を向けると，そこに一種の不均衡が生じていることは否定できない。とくに第二の呪い（断片３）では，食事の世話に関する手落ちが息子二人の相討ちによる死というきわめて悲惨な事態に導くものとされる。この呪いが「狭量で高貴ではない」という上述の古注の批判も，罪と罰のアンバランスを指摘したという点では考慮に値するだろう[18]。後述するように，近親相姦の罪に再び重点をもどすことによってこの不釣り合いを是正したのはアイスキュロスであるが，それ以前の叙事詩の伝統では，この不均衡を修正しようとした形跡は見出されない（あったかもしれないが，残っていない）。むしろ，この因果関係は誰が読んでも幾分理不尽に思われるから，それなりの理由があると考える方が妥当であろう。もちろん『テーバイス』の断片はごく僅かなため，そこからこれ以上推論することは無理である。しかし叙事詩の環の時代には，共通の物語の泉から自

由に汲み上げて創作する口誦詩の詩作習慣がまだ生きていた。それを背景にして見るならば，『テーバイス』の構想自体が一概にその作者独自の創案と考えるのは早計であり，現存する古い叙述をできるだけ調べてみる必要がある。

C．ステシコロス，ヘッラニコス，ヘシオドス

1977年に，前7世紀後半から6世紀前半の抒情詩人ステシコロスの作とされる詩のパピルス断片（リール・パピルス）が公刊された。その断片73と76は，オイディプスの息子たちがテーバイをめぐって争う話を記しており，『テーバイス』が成立したのとほぼ同じ時代の伝承を知るうえで貴重である。またこのテーバイ戦争の発端に関する部分は，『テーバイス』の断片にはもちろん欠如している。ここではテクスト批判上の問題には触れず，ほぼ明瞭に判読しうる範囲内で大意を要約してみる[19]。

1．予言者テイレシアスが，テーバイに降りかかろうする災いの運命を告げる。それは，エテオクレスとポリュネイケスが互いに討ち合って死ぬか，それとも国が攻略されるか，そのいずれかだという予言であった。

2．そこで二人の兄弟の母は，息子らの争いをやめさせ，災いを避けるために提案をする。その提案は，二人が籤壷を振り，最初に自分の籤が出た者は家畜と黄金を持って国を去り，あとの一人がテーバイの国を王として治めるというものであった。

3．息子たちは，ただちに母の提案に賛成する。早速籤壷が振られ，ポリュネイケスの籤が最初に飛び出す。

4．そこでポリュネイケスは出発の準備をする。そのときテイレシアスは彼に，アルゴスの王アドラストスに迎えられるだろうと告げる。

5．ポリュネイケスが国を出ていくあたりで断片のテクストは途切れているが，このあとポリュネイケスとアルゴス軍がテーバイを攻め，二人の兄弟が対決してどちらも滅びることが語られたであろう。

この断片では，オイディプスは現われず（すでに亡くなったためであろう[20]），彼の呪いへの言及も欠落している。そしてオイディプスの呪いの代わりに未来を予告する役割を果たしているのは，テイレシアスの予言である。また，息子たちの母の名が明らかではない。ホメロスでは，オイディプスの最初の妻で実母であるエピカステは真相の発覚後（すなわち子供が幼い頃）に自殺したと語られた。他方『テーバイス』では，オイディプスは第二の妻エウリュガネイアから子供をなしたと考えられる（本章B節参照）。このステシコロスの話では，成人後の息子らが争いを起こすから，おそらく『テーバイス』の場合と同様エウリュガネイアが二人の兄弟の母とするのが妥当であろう[21]。

ところで物語においては，呪いと予言（または神託）は未来の予示という役割のうえで重複するため，どちらか一つだけが用いられる傾向がある[22]。そのためこのステシコロスの詩では，

オイディプスの呪いは語られなかった可能性が大きいであろう。ここではテイレシアスの予言は，二人の息子が相討ちして死ぬという内容では『テーバイス』の断片(3)と一致しているが，国の攻略という別の運命も示している点では異なる。だがその予言は，物語展開の予示という点では，テーバイ戦争の発生と肉親同士の殺し合いのどちらをも予告しているのであり，『テーバイス』におけるオイディプスの二つの呪いに対応している。さらにこの作品には，予言以外にもステシコロスの独創らしい要素が多い。例えば仲裁役として母親が登場することや，彼女が息子らに籤を用いて未来の行動を決定させるといった点はとくに興味深い[23]。しかし詳細な工夫は別として，テーバイ戦争の発端のとらえ方そのものは，そう新しいものではなかったように思われる。

断片では，おそらく初めにテイレシアスが予言を述べたのち（176〜），母親がまず予言者に，次に息子らに対して嘆きながら以下のように語りかける。

「どうか遠矢を射るアポロン神が，あなたの
すべての予言を成就なさらないように。・・・　210
息子らが互いに殺し合うのを見るのが
わたしの宿命であり，運命の女神がそのように定めたのなら，
すぐにも忌まわしい死の果てが，わたしにやって来ますよう！
――そんな事態を，いつかこの目で見る前に。
苦しみに胸は痛み，涙はあふれる。　215
わが家の子らが
死ぬか，それとも都が滅ぼされるか。

けれど息子たちよ，わたしの話を（聞きなさい）。
わたしがおまえたちに，なすべきことを明かしてあげよう。
一人はディルケの泉のほとりの，この館に住みなさい。　220
でも一人はここを去りなさい，
愛しい父のすべての家畜と黄金をたずさえて。
（ここを去るのは）籤によって，
運命ゆえに最初にあたった者なのです。
わたしがこうしなさいと教えるのは，　225
おまえたちを悲惨な死の定めから救うためです。
尊い予言者が警告しました，
クロノスの子は，若い子らを・・・
それともカドモス王の町を・・・と。
最悪の事態を，ずっとあとまで引き延ばそう，　230

はじめから運命は定まっているけれども。」

このように高貴な女は，心をこめて語って聞かせた。

（ステシコロス断片，リール・パピルス，76Aii＋73i）

エテオクレスとポリュネイケスの母親は，まず予言者テイレシアスから息子らが死ぬか都が滅びるか，いずれかの事態が訪れるとの「運命の女神の定め」(epeklosan de Moirai: 212）を告げられる。ここでとくに強調されているのは，予言の教える未来の事件が，運命・宿命として決定づけられたという点である。ステシコロスはこのことを，「宿命である」(morsimon estin: 212）という言葉でも明確に示している。運命によって，不幸はかならずテーバイ王家を襲うだろう。しかし母親は，「はじめから運命は定まっているけれども」(231）なんとか一族の災厄を逃れ，「最悪の事態を，ずっとあとまで引き延ば」したいと願う（230)。そこで彼女は，息子たちが王位をめぐって争うことがないよう（cf.226)，自分が間に立って抽籤を行ない（223)，それによってテーバイ王家の王位を含む父の遺産の継承を決定するという方法を思いつく。籤引きならば，誰の恣意も介入しないから遺産争いの騒動は生じまい。そのうえ彼女は，籤による双方の取り分として，一方にはテーバイの支配権を（220)，他方には家畜と黄金すなわち持ち運びできる資産（222）を設定し，最初に自分の籤が出た者が後者を取ることに決め，さらにその者は都を去るという条件を加える（223-224)。この籤による取り分としての遺産分割案はできるかぎり平等を考慮したものだが，たとえ不満が残っても，抽籤後には兄弟は別々の場所に住むことになるから，二人の暴力的衝突は最大限回避することができる。こうして抽籤の結果，エテオクレスが王位を継ぎ，ポリュネイケスは都を去ることになる。そのとき，再度のテイレシアスの忠告により，ポリュネイケスは新たな居住地としてアルゴスへ行くことになる。

ステシコロスのパピルス断片はこれ以降の部分が大きく欠損しているため，その後ポリュネイケスがなぜテーバイを攻めることになるのか不明である。しかしステシコロスの伝承に似た話を，前5世紀の歴史家ヘッラニコスの伝として記録している古文献があり，その記述が貴重な示唆を与えている[24]。典拠は，エウリピデスの『ポイニッサイ』の古注（71行）である。

ポリュネイケスがアルゴスへ行った事情については，異なる説がある。ペレキュデス（前5世紀頃の作家）によると，ポリュネイケスは暴力的に追放されたという。しかしヘッラニコスによれば，彼は取り決めにもとづいてエテオクレスに王権を譲ったのである。すなわち，エテオクレスは彼に，王権を選ぶか財産を取って他国に住むか，どちらを望むかと選択を申し出たのだ。するとポリュネイケスは，王権はエテオクレスに譲ることに決め，ハルモニアの衣と首飾りを持ってアルゴスへと去った。その首飾りはアプロディテが，衣はアテネがハルモニアに授けたものだった。それらの品を，ポリュネイケスはアドラストスの娘アルゲイアに与えた。

（*FGrH*, 4F98）

この古注は，エテオクレスとポリュネイケスが一年毎に王位を交替するという約束を交わしたにもかかわらず，エテオクレスが一年後に譲位せず，追放されたポリュネイケスはやむをえずアルゴスに亡命したという『ポイニッサイ』の記述を説明するために記された。ヘッラニコスの伝承では，母親による籤の提案の代わりに，エテオクレス自身が遺産を王権と財産に分け，その選択をポリュネイケスに委ねた結果，ポリュネイケスは自発的に財産を選んでテーバイを去っていく。これは籤に相当する不公平の起こらない相続の決定方法である。ここでは予言（あるいは呪い）については言及されないが，兄弟が不幸な事態を回避しようとする試みを行なった理由として，何らかの未来の啓示を想定する必要があろう。おそらく遺産分割をめぐる恐ろしい予告があり，その災いから逃れるために互いに遺恨の残らぬ分配と離別の方法が考案されたのである。この点では，ステシコロスの伝承と同様である。しかしヘッラニコスの伝承からは，そのあとの事情がうかがえる。すなわちポリュネイケスは，アルゴスへ行く際ハルモニアの衣と首飾りを携えていき[25]，それをかの地の王アドラストスの娘アルゲイアに贈ったのだった。

テーバイの始祖カドモスの妻ハルモニアの首飾りは，女性の心を誘惑する不思議な力を持ち，その後のテーバイ戦争の神話ではエリピュレに与えられ，彼女の夫アンピアラオスがテーバイ攻めの戦いに出征する原因となる（アポロドロス，3.6.2)。しかしヘッラニコスでは，それはアドラストス王の娘アルゲイアに贈られたとされる。アポロドロス（3.6.1）によると，ポリュネイケスはアルゴスでこのアドラストスの娘と結婚する。その後ポリュネイケスは，争いを避けるためにテーバイを離れたにもかかわらず，結局故国を攻略して兄弟と対決することになるが，その戦争の発生に，このアルゲイアという女性が何らかの原因をなしていたことが考えられる。次の引用は，そのアルゲイアがオイディプスの葬儀に参列したことを伝えるヘシオドスの『名婦列伝』に言及した『イリアス』第23巻679の古注である。

> ヘシオドスによると，オイディプスがテーバイで死んだのち，アドラストスの娘アルゲイアが，他の人々とともにオイディプスの葬儀にやって来た。　（ヘシオドス断片，192ML）

ヘッラニコスの伝承では，ステシコロスの場合と同様遺産相続ののちポリュネイケスはアルゴスへ行くから，アルゲイアとの結婚のずっと以前にオイディプスは他界していたはずである。ところがこのヘシオドスの伝承によると，アルゲイアは結婚後に舅のオイディプスの葬儀のためテーバイを訪れたという状況を前提とするので（彼女が結婚以前にテーバイへ行く必然性はない)，ポリュネイケスがアルゴスに着いた時点ではまだオイディプスは生きていたことになり，その事情はヘッラニコスやステシコロスの伝承とは異なっている。この経緯については，パウサニアスの次の記述（9.5.12-13）がヘシオドスの伝承を補っている[26]。

> ポリュネイケスは，オイディプスが存命中で王位に就いていた間に，ひそかにテーバイを去っ

た。なぜなら彼は，自分たちに対する父の呪いが実現しまいかと恐れていたからだ。彼はアルゴスに着くと，アドラストスの娘を娶ったが，オイディプスの死後エテオクレスに呼ばれてテーバイに帰国した。だが帰国すると，エテオクレスとの不和が生じ，再び亡命した。そこでポリュネイケスはアドラストスに，自分を帰国させるための軍隊を貸してくれるように頼んだ。

オイディプスが王に在位中に息子たちを呪ったという記述は，『テーバイス』の呪いの場面とは異なる状況を想起させるが，ポリュネイケスが父の呪いの実現を回避するためにテーバイを去るという行為は，ステシコロスとヘッラニコスの伝承の場合と類似している。ポリュネイケスがアルゴスへ逃避したのは，兄弟争いの恐ろしい結末を予告した父の呪いが成就しないよう，エテオクレスから遠ざかるためであった。しかしやがてオイディプスが死んでその葬儀のために帰国したとき，呪いどおりに兄弟間の衝突が生じ，テーバイ戦争が起こる。この葬儀のための帰国のときに，ポリュネイケスはアルゲイアを連れていったことが，ヘシオドスによって言及されていたのである。テーバイでのオイディプスの葬儀というホメロス以前の古い要素が残っている点でヘッラニコスの伝承とは異なるが，ヘシオドスの記述に反映した伝承もまた，ポリュネイケスが祖国を攻撃するようになる際に，アルゲイアが重要な役割を果たす女性だったことを示唆している。

さてそこで，以上の諸伝承の内容をここで整理してみると，次のようになるだろう。

1．『テーバイス』では，息子たちが父の遺産をめぐって争うことと，彼らが戦争で相討ちして滅びることが，オイディプスの呪いによって告げられた。
2．ステシコロスの断片では，予言によって戦争と二人の息子の死が予告されるが，彼らの母親が籤による遺産分割と兄弟の離別を提案し，恐ろしい予言の実現を回避しようと試みる。
3．ヘッラニコスの伝承によると，不幸な争いを避けるために，エテオクレスの遺産分配案に同意したポリュネイケスが，王位を譲り財産を持ってアルゴスへ行く。だが彼は，そこでハルモニアの衣と首飾りで王女アルゲイアを魅了することになる。
4．ヘシオドスの伝承によれば，アルゲイアはポリュネイケスの妻としてオイディプスの葬儀のためテーバイへ行く。そのとき（パウサニアスによると），これまで災いを避けようとしていたポリュネイケスがエテオクレスと対立し，テーバイ戦争が始まる。

『テーバイス』の断片は，テーバイ戦争の展開を見通したうえでオイディプスの呪いを述べているが，戦争発生の具体的経過については不明である。しかしステシコロスとヘッラニコスの伝承によると，最初呪い（ないし予言）の成就を回避するために，テーバイ王家の遺産相続が籤や他の合理的方法を用いて行なわれたことが分かる。ところが不幸を回避しようとする努力は，その後の巡り合わせによって水泡に帰すことになる。すなわち予告どおりに兄弟間の争いが始まり，その戦争で二人の若者が互いに討ち合って滅びることで，避けようとした事態が結局現実のもの

となるのである。その際，回避的行動から一転してポリュネイケスがテーバイを攻撃することになる経緯の中に，彼の妻となったアルゴス王の娘が関与したことが，ヘッラニコスの伝承とヘシオドスの断片（パウサニアスの記述を補う）から推測しうる。ヘッラニコスの伝承では，ポリュネイケスが父の遺産のうち財産（動産）を選んだために，その中に含まれたハルモニアの衣と首飾りが王女を魅惑する。一方パウサニアスの記述では，災いを避けて亡命したポリュネイケスは父の葬儀のため祖国に帰る。ヘシオドスの断片は，その折アルゴス王女が夫に伴ったことを伝えており，例えばテーバイの富に魅了された彼女が，王家の相続をめぐる兄弟争いのきっかけになるといった展開も想像できる[27]。

ステシコロスおよびヘッラニコスの伝承（上記2と3）とパウサニアスの伝承（上記4）の間には，オイディプスの死の時期に関して相違がある。前者では呪い（ないし予言）を回避する行動が遺産分割という形で実行されるから，オイディプスの死はそれに先立っている。他方後者の場合，呪いの成就を避けるためのポリュネイケスの亡命は，父親の死の前に行なわれる。オイディプスの葬儀の伝承はホメロス以前にさかのぼるため，後者の伝承の方が古いと言えるかもしれない。しかし後者では，オイディプスは王位にある間に息子らを呪うから，『テーバイス』の呪いの状況とは矛盾する。以上のように悲劇以前の伝承を考察してみると，次のことが言えるであろう。

1．オイディプスの呪いは，息子たちが父の遺産をめぐって争いを起こし，そのため勃発した戦争で彼らが討ち合って死ぬことを予告していた（ただし呪いは，予言者の予言に置き換えられる場合もあった)。

2．呪いの成就を避けるための行動が取られた。その形態には，(a)オイディプスの死と遺産相続以前に，ポリュネイケスが自発的にアルゴスへ去る，(b)オイディプスの死後の遺産分配の結果，約束に従ってポリュネイケスがアルゴスへ行く，の二種類がある。

3．ポリュネイケスがテーバイを去ってアルゴスへ行ったため（つまり呪いの実現を回避しようとしたため)，テーバイ戦争が発生する。その際争いの発端において，(a)オイディプスの葬儀のために，ポリュネイケスが妻としてアルゴス王女をテーバイへ連れていったこと，あるいは(b)ポリュネイケスが遺産相続の結果獲得した財産の中に，ハルモニアの衣と首飾りという魔法の品物があり，それらがアルゴス王の娘に贈られたこと，がそれぞれ2の(a)と(b)に続いて起きている。

4．ポリュネイケスとともにアルゴス軍がエテオクレスの守るテーバイを攻撃し，戦いはテーバイ側の勝利に終わるが，戦闘中に二人の兄弟は相討ちして倒れる。こうしてオイディプスの呪い（あるいは予言者の予言）が，すべて成就する。

以上が，前5世紀前半以前に語られていたと考えられるオイディプスの呪いから第一次テーバイ戦争の結末までの神話の概略的な因果関係である。もちろん，これ以外の話形がなかったというわけではない。例えば『ポイニッサイ』の前述の古注によると，前5世紀の作家ペレキュデス

は，エテオクレスがポリュネイケスを武力でテーバイから追放したと語っていた。しかしその話が，呪いを伴う一貫した長い物語の一部であったのかどうかは不明である。また現存の文献をもとにして推定できる1～4の物語展開の中で，ポリュネイケスがアルゴスの王女を妻にしたことが運命の転機をなしたと想定できるのだが（例えばソポクレスの『アンティゴネ』でも，岩窟に閉じ込められる主人公アンティゴネ（ポリュネイケスの妹）が一族の運命を顧みて「ああ，お兄さま，何という不運な結婚をなさったものか！」と嘆いている: 869-870)，それでは王女アルゲイアとの結婚が具体的にどのようにして夫を祖国の攻略へと促すことになったのか，その詳細については正確に知ることができない。

しかしながら，以上の考察から，古い神話叙述の共通の構造はすでにはっきりとした形で見えてきたと思う。すなわち，上述の物語の運びには1→2(a)→3(a)→4と，1→2(b)→3(b)→4の二通りが考えられるが，いずれの話形にも同一のパターンが認められるのである。そのパターンを要約すれば，

(1)話の最初に恐ろしい予言が告げられ，

(2)それを受けた人物（たち）が予言の実現を回避しようと試みる。

(3)だがそうした回避の努力は，かえって予期せぬ運命の転換をもたらし，

(4)最後に予言はそのとおりに成就してしまう。

となろう。つまり，オイディプスの息子たちについての古い叙述のこのパターンは，まさに彼らの父親の物語の構造と同じなのである。

ライオスへの神託から始まりオイディプスの罪の発見にいたる物語は，新生児が父を殺し母と結婚するだろうという運命のお告げを受けた親が，その赤子を遺棄して予言の実現を避けようとするが，しかしその回避の努力のゆえにかえって忌まわしい運命を成就してしまうという，現代でもなお西洋で語り継がれている「宿命の子」の民話と共通の展開を示していた。この点については前稿で比較的詳しく考察したので[28]，ここでは説明を省略することにする。ただ本稿において注目したい点は，古いオイディプスの物語がテーバイ戦争との関連をもって語られ始めたとき，引き続き物語を発展させるために，最初の話とほぼ同一の構造を次の話題の中で反復させるという方法が，物語作者あるいは無名の創作・伝承者によって用いられたことである。ギリシアの古い神話叙述は，初めのオイディプスの物語の「神託→回避→成就」のパターンを，次の息子たちの戦争の話において「呪い→回避→成就」という形で繰り返すことによって語りを継続させ，同時に拡大した物語全体の統一を図ったものと思われる[29]。こうして文献として残存する『テーバイス』やステシコロスなどの断片的記述の背後に，当時まだなお盛んだった口誦文学の創造的活力を垣間見ることができよう。

だが，このような事例は，とくに古代ギリシアに限らないだろう。テーバイ王家の運命をめぐる神話とよく似たパターン反復による物語発展のテクニックは，民話における「宿命の子」の話の場合にも見ることができる。

D.「宿命の子」の民話の発展——ユダの物語の場合

前稿で述べたように，元来「宿命の子」の民話は，予言と子供の誕生から，罪を犯した母子が再認し運命の成就を確認する場面までで一つのまとまりをなし，一応完結する話であった[30]。なぜなら，母子再認と罪の発覚後については，話の形態はまちまちで大きく異なるからである。多くの場合，母子の死や離別などごく簡単な結末で終わっている。しかしなかには，なお物語が続き，そこで主人公が再び運命の転変を体験する場合もある。その場合，一つの傾向として，物語は聖人伝の性格を帯びている。例えば聖アンドレアスに関するロシアの民話では，罪の発覚後男は三人の神父を殺し，四番目の神父によって地下牢に三十年間閉じ込められたあと，罪を許されて聖人として崇められる[31]。類話として，グレゴリウス一世や聖アルバヌスの伝説があり[32]，また同様に罪人がさまざまな試練を経て聖職者になる話が多数伝わる[33]。他方「宿命の子」が聖人ではなく，逆に悪人の典型として人生を終える一連の伝承がある。それが，新約聖書でキリストを裏切ったとされるイスカリオテのユダの物語である[34]。次の要約は，多数の変種が存在するそのユダの物語のテクストのうち，最古とされる中世12世紀の写本[35]にもとづく粗筋である。

ある裕福な男が，妻の妊娠中，父を殺す息子が生まれる夢を見る。それで男は，生まれた子の脛に串を刺して薮に捨てる。しかし赤子は拾われて，ある女に育てられる。子供はユダと呼ばれ，成人してヘロデ王の奴隷になる。ある日王が宴のために果物を求めたため，ユダはある果樹園に忍び込んで，果物を盗んだ。果樹園の主人は，盗みを見つけてユダと争った。じつはその主人はユダの実の父だった。その争いで，ユダはそれと知らず父を殺す。

人々はユダの殺人を責めた。しかしヘロデ王は，ユダと殺された男の妻を結婚させ，騒動を解決した。結婚後のある日，妻はユダの脛の傷を見つけた。もしやと思い詮索すると，夫は自分が薮に捨てられた子だったと言った。彼女はすぐに夫がじつは息子だと悟り，激しい嘆きと呪いの言葉を叫んだ。

ユダは深く罪を悔やみ，家を去った。当時イエスがその地に滞在し，人々の体や心を癒していた。ユダはイエスに会いにいき，哀れみを乞った。イエスは彼を弟子にして，自分の財布の管理をまかせた。ユダはその財布からいつも金を盗んだ。ユダはついに報酬目当てに主人を売り，首をくくって自殺した。

この最古のユダの物語の特徴は，初めの夢のお告げでユダの人生のすべてが予示されず，前半の父殺しのみ示されることだろう。例えば有名な中世聖人伝集『黄金伝説』第45章に収録されたユダ伝によると，母は「全種族を滅ぼす子供」[36]を身ごもった夢を見ると言われ，この予告は父殺しではなく（あるいはそれを含むとも解される），最後のキリストを裏切る行為を予想させている。また他のユダ物語でも，最初の夢や予言には子供が「ユダヤ民族（または世界）を滅ぼす」

あるいは「キリストを裏切る」などの結末の出来事が必ず述べられるのが普通のようである[37]。したがってこの12世紀のテクストは，この点でもギリシア神話のオイディプスの話に近いと言えよう。またこのテクストのもう一つの特徴は，上述の点と関連するが，真相の発覚時――すなわち母子再認のとき――に，母が不幸な二つの事実について嘆きの言葉で表現するだけでなく，息子に対して恐ろしい破滅の呪いをかけていることである。テクストでは彼女の言葉は，次のように直接話法で語られ，聞き手（読者）に強い印象を与えている[38]。

「ああ，わが夫の不幸な夢よ，息子がそれを成就したとは！　そのうえこのわたしにまで，悪意と罪の狂気がふりかかった。わたしの出産の日は滅びてしまえ！　この男を暗黒の闇が襲えばよい。」　（『中世イスカリオテのユダ伝』より）

最初の文はユダの父殺しを示し，二番目の文はユダとの結婚を表わす。これらは，運命的な出来事を確認する言葉である。しかし最後の二つの文（「わたしの出産の日は滅びてしまえ！　この男を暗黒の闇が襲えばよい」）は，他のユダ伝にこれに相当する表現はなく，ユダのその後の運命を前触れする点で異例である。もちろんこの母の呪いは未来を予示し，最初の夢のお告げを補う役割を果たしている。ユダの母は，自分が生んだ子供を呪い，息子が死ねばよいと祈っている。息子が滅びることを願うこの激しい呪いの言葉は，オイディプスによる息子たちへの呪いとそっくりである。ただユダ物語の場合呪いはユダ自身にかけられ，オイディプスの話の場合は息子たちが対象となる点で異なっている。

この12世紀の写本のユダの物語が，オイディプスに関するギリシア神話から影響を受けた可能性は否定できないだろう[39]。呪いに関しては，スタティウスのラテン語の叙事詩『テーバイス』第1巻に息子たちへのオイディプスの呪いが語られていて（46ff.），そこからの何らかの影響も考えられる。しかし筆者が注目したいのは，ギリシア神話に似た呪いのモチーフが，テーバイ戦争のような「宿命の子」の子孫の争いとはまったく異なる単一の主人公ユダの物語の後半の文脈にどう用いられているかである。それはもはや神話的モチーフの借用によっては説明できない，伝承の根本的性格にかかわる問題であろう。

話の後半でユダは，母の真相確認と呪いの言葉を聞いたあと，罪を深く悔いてキリストのもとへ行く。その理由は，キリストが「多くの罪にうちひしがれて訪れた人々を受け入れ，まるで羊飼いのように，あわや狼に食べられようとする羊たちを襲撃から救い出した」からだと述べられる。民話では登場人物の主観の表現は抑えられるから，ユダの内面や意識の動きははっきり伝わってこない。しかしユダが頼ろうとしたキリストの「徳と敬虔」についてのこの比喩的効果の鮮やかな説明は，ユダがあたかも獣のように襲いかかってくる大きな災難にひどくおびえ，安全な場所を求めて必死で逃げていく人物のような印象を与えている。民話の語りを聞く（読む）者には，たった今直接話法で述べられた母親の呪いの言葉が強く耳に残っているはずである。ユダは，母

の恐ろしい呪いの力から逃げようとしているのだ。そこでキリストは「彼の望みに同意する」。だが，キリストは予言者のようにユダの運命を知っていて，この新しい弟子にわざわざ大切な財布の世話を委ねる。そのためユダは金銭欲にとらわれて主人を売り，自己の救いがたさを悟って自殺する。すでに宿命づけられていた破滅から，ユダはどうしても免れることができなかったのである。

最古の写本のユダ物語の後半は，例えば『黄金伝説』の話形と比べるとかなり単純である。『黄金伝説』は，『ヨハネによる福音書』第12章のマグダラのマリアの香油の逸話を用いるなどしてユダの貪欲さ・勘定高さを念入りに強調し，キリストを裏切るという自滅的行為の動機を明らかに根深い金銭への執着癖に帰して，裏切りの必然性を彼の性格によるものとしている。それに対し12世紀の写本では，ユダの破滅はむしろ運命と強く結びつけられていて，彼の物欲の深い性格は，キリストさえも避けがたいと見た運命の実現を促す従属的な要素にすぎないように感じられる[10]。

こうして見るとユダの話の後半は，前半と同様，この人物をめぐる運命の不可避性を語ろうとしていることが分かるだろう。このテーマは前半において，「夢のお告げ→捨て子によるお告げの回避→お告げの成就（父殺しと母との結婚）」という形で展開するが，後半でも「母の呪い→呪いからの逃避（キリストへの帰依）→呪いの成就（ユダの自殺）」という同じパターンによって繰り返し表現される。このように「宿命の子」の民話が，同じ構造の反復によって増補・拡張されたのが12世紀のテクストに書き留められたユダの話である。ここでは詳述できないが，前述の聖人伝など他の多くの「宿命の子」の話においても，罪の発覚後の出来事について長く語られる場合，その後半部は前半と類似の出来事の連鎖で構成されている[11]（ただし「運命の予告→回避→成就」の構造的反復はない）。物語はパターンの繰り返しによって増殖する。この語りの発展のプロセスにこそ，ユダ物語の最古の伝承の民話的性格を読み取ることができるだろう。

以上のように，ユダの物語に見られる「宿命の子」の民話の発展は，ギリシア神話のオイディプスとテーバイ戦争の物語の古い伝承に認められるパターン反復と同様の方法にもとづいている。しかもそのパターンは，最初予言に始まり，次にその回避的行動を経て最後には予言が成就するという「宿命の子」の民話に独特のものである。ギリシア神話のテーバイ戦争の話はユダがキリストを裏切る話とは似ていないから，中世の説話作者がギリシア神話の筋書きを模倣してユダの死についての話を創作したとは考えられない。もちろんユダの裏切りは，新約聖書でよく知られていた。しかしその周知の逸話に母の呪いという新たな要素を加えて，運命は避けがたいという教訓を再びユダの死をめぐって展開する方法自体は民話的と言えるだろう。この中世のユダ物語は，そのテーマと構成のテクニックにおいて，前節で述べた古代ギリシアでのオイディプスとその息子らの古い伝承とパラレルの事例である。

E．呪い，運命，籤

さて，再び『テーバイス』のオイディプスの呪いにもどりながら考えてみよう。

前節で見たユダの母親の呪いの場合，彼女は息子の破滅を祈りつつ，じつは運命そのものを呪ったのであった。「わたしの出産の日は滅びてしまえ」という言葉は，ユダを生んだという運命的な事態が消え去るようにとの祈りであり，それは忌まわしい出産の事実を体現する息子を「暗黒の闇」(caligo tenebrarum) つまり死が「襲う」ことを意味する（「暗黒の闇」は出産以前の胎内の闇とも解しうる)。この呪いは，恐ろしい運命の予告を受けたのち，その成就を確認する主体としての母の感情の表現としてはまったく自然であって，だからこそ切実さと迫力を持っている（ホメロスが伝えたエピカステの呪いも，これに近い性質のものだったであろう)。そしてここで成就する最初の運命は，母子結婚という単なる行為によってではなく，実際は母親による真相発見という記憶と意識の働きをもって初めて完結するものと考えられるから，真実に対し反応して彼女が心の底から叫ぶこの激しい――しかし誰もが痛ましさに胸打たれる巧まざる――呪いもまた，運命の仕業だと言うべきであろう。運命を呪う母の言葉さえもが，じつは第二の段階へ向かう運命に支配されているのである。こうして母の呪いは運命とほとんど一体化し，最終的目標であるユダの死に向かって再び破滅の歯車を回転させていく。

この最古のユダ物語に対して，同じ「宿命の子」の話の増補版として見たオイディプスとテーバイ戦争の古い伝承では，第二の運命を発動させる呪いは，最初の運命の成就（父殺しと母子結婚の発覚）と切り離されている。B節で述べたように，オイディプスの呪いは，第一次テーバイ戦争の発生とその結末を予告するために，真実発覚の直後ではなく，その後再婚によってできた子供らが成人したあとの出来事とされたであろう。そして『テーバイス』によると，その際オイディプスは息子たちの行為を罰するために呪いをかけたと語られている。息子らの罪は，王権への過度の執着と扶養義務の怠慢であった。しかしその後の物語は，息子たちがもっぱら自己の罪過に対する罰をこうむるという形では展開しなかったはずである。ステシコロスの断片やヘッラニコスの伝承によれば，彼らは予言や呪いを回避しようとして自滅を招いたという成り行きが想定される。とくにステシコロスの断片では，運命の不可避性は「籤」というきわめて逆説的な遺産分配の方法によって見事に表現される。すなわち，予言の成就を遅らせようと籤による遺産分割を提案した母親は，それを実施したため，運命を回避するどころか，その実現をいっそう促進する結果を生んだのである。「運命ゆえに，籤によって最初にあたった」ポリュネイケスは，アルゴスへ行って祖国攻撃の機縁をつくる（C節に引用したステシコロスの断片223-224参照)。ここでは，「籤」(lakhos) は明らかに「運命」(Moira) と同一視されていて（もちろんlakhos自体にも「運命」の意味がある)，そもそも遺産相続の不満を防いで争いの運命を避けるべく採用された籤という公平な手続きが，じつは破滅に導く運命そのものであるという皮肉な事実が暗示されている。こうした作者の詩的趣向は，もとの伝承の意味合いを深めているからひときわ効果的なのであり，詩人がけっして無から物語を創造したのではないことは，これまで述べてきたと

おりである。

運命の成就をめぐるこのような物語展開の発端として，オイディプスの呪いは，まず息子たちが十分理解しうるほど明確な表現で述べられる必要があったであろう[42]。次に，呪いは罰として述べられたとしても，その原因となった罪にまさる恐ろしいものでなければならない。なぜならオイディプスの息子たちはその後，何よりも父の呪いがもたらす恐るべき災禍から逃れようとして，逆に自滅への道をたどることになるからである。しかしユダの物語において，運命と一体化した母の呪いが，それを逃れようとする息子に彼自身の貪欲な性格をつうじて破滅をもたらすように，オイディプスの息子たちの場合も，父の呪いが，王権を渇望し親族の絆を蔑ろにする彼らの悪しき心根をとおして滅亡の運命を成就させる。『テーバイス』の伝承で，息子らの罪に対する父の呪いが理不尽な印象を与えるとすれば，それは，呪いが真相発見の場面とは独立していて，一見運命との関わりがないかのように思われるからであろう。しかし，じつはその理不尽さこそまさに，オイディプスの呪いが運命を体現している証拠である。息子たちは，過ちと釣り合わないかに見える思いがけない恐ろしい罰から逃げようとして，運命を実現させるのである。

2．アイスキュロス『テーバイを攻める七人の将軍』

A. 呪いについての言及

以上の悲劇以前の伝承に対して，アイスキュロスは異なる角度からオイディプスの呪いをとらえていたように思われる。テーバイ王家の物語三部作の第一，第二部は現存しないので，第三部の『テーバイを攻める七人の将軍』から，まずその呪いについての言及を抜き出してみる。

1．プロロゴス：テーバイ戦争が始まり，ポリュネイケスがアルゴス軍とともにテーバイに襲来した。テーバイの七つの門を攻撃するため，それぞれ一人ずつの敵将が籤で割り当てられているとの使者の知らせを，テーバイを守るエテオクレスが聞く。

エテオクレス　おお，ゼウスよ，大地よ，都を守る神々よ，
そして父の呪いなる強力なエリニュスよ，
どうかわが都を根こそぎ破壊し
敵に渡してギリシアから滅ぼし尽くさないでください。　(69-72)

2．第二エペイソディオン：第七の門にポリュネイケスが籤で割り当てられたことを聞いたエテオクレスは，自分が兄弟と対決する運命を悟る。

2－1．**エテオクレス**　おお，神々に狂わされ，大いに神々に憎まれた者らよ，
おお，まことに嘆かわしいわがオイディプスの一族よ，
悲しいかな，今こそ父の呪いが成就する時だ。　(653-655)

2－2．**エテオクレス**　身内なるわが父の敵意を含む呪いが成就せんと，

乾いた涙なき両眼のそばに座り,
あとの死より先の利益を説いている。 (695-697)

2－3．**エテオクレス** オイディプスの呪いが煮え溢れたのだ。
夢に現われた幻影が見せたものは
あまりにも真実であった，父の遺産を分配するあの光景は。 (709-711)

3．第二スタシモン：コロスがライオス以来のテーバイ王家の悲運と呪いを歌う。

3－1．**コロス** わたしは恐れおののいた， 家を滅ぼす
神々には似つかぬ神,
あまりにも真実に災いを予言する神,
父親の祈ったかのエリニュスが,
狂ったオイディプスの激しい怒りの
呪いを成就しはしまいかと。
子供殺しのこの争いが，その呪いを急き立てる。 (720-726)

3－2．**コロス** 古くより伝わる呪いの
最後の決着は重々しい。破滅は
生じると過ぎ去らない。
破滅は利を求める人々の
積みすぎた富の積み荷を
沈む船尾の先から投げ捨てる。 (766-771)

3－3．**コロス** 不幸な人が惨めな
結婚に気づいたとき,
苦しみに耐えかねて
その心は狂い,
二重の災いを成し遂げた。
かれは父親殺しの手によって
わが子より大切な両眼をえぐり取り,

そして［惨めな］養いに立腹し,
子供たちに，ああ，ああ,
苦い言葉の呪いを投げつけた,
いつか剣をふるう手で,
財産を分かち合うだろうと。
今わたしは恐れる,

足速きエリニュスがそれを成就せぬかと。 (778-791)

4．第三エペイソディオン：使者が兄弟対決の結果を報告する。

使者　二人は兄弟殺しの手でともに殺し合った。
このようにダイモンは，あまりにも二人に公平だった。
ダイモン自身が，まことに不運な一族を滅ぼしている。
このようなことは，喜びとともに涙を誘う。
国は安泰ながら，指導者たる
二人の将軍は，鍛え抜かれた
スキュティアの鉄で全財産を分け合った。
二人は，墓に与えられる土地だけを持つだろう，
父親の呪いのままに惨めにも運ばれて。 (811-819)

5．エクソドス：コロスが葬送の哀悼を歌う。

5－1．**コロスの長**　父親が発した祈りの言葉は
あやまたず成就した。
ライオスの神を信じぬ謀りごとは衰えなかった。
国は憂いにみち，
神託の鋭さは鈍らない。 (840-844)

5－2．**コロスの一**　おお，おお，館の壁を打ち倒す者よ，
そして苦い独裁を味わった者よ，
ついにあなたたちは，鉄によって
和解した。

コロスの二　この上もない真実を，父オイディプスの
恐るべきエリニュスは成し遂げた。 (881-886)

5－3．**コロスの二**　敵意はやんだが，流血の大地に
二人の生命が混ぜ合わされた。
まことに二人は血のつながる者ら。
争いのむごい仲裁者は，海を渡ってきた
異国の者にして，炎から鍛え出された
鋭い鉄。財産の悪しき分配者なる
アレスはむごい。父親の呪いを
実現させる。 (938-946)

5－4．**コロス**　おお，不運を授ける悲しいモイラよ，

そしてオイディプスの恐るべき幻影よ，
黒いエリニュスよ，まことにあなたは力強い。 (975-977＝986-988)

B．オイディプスの呪いの原因

第三部でこれほど頻繁に言及されるオイディプスの呪いは，失われた第二部『オイディプス』において何らかの形で語られていたであろう。では第二部で呪いは，どのような状況においてかけられたのだろうか。それを示唆する重要な個所は，上述3－3のコロスの言葉である。それによると，オイディプスは母との結婚の事実を知った直後に，「二重の災いを成し遂げた」と言われる。そしてこの「二重の災い」とは，「両眼をえぐり取る」ことと「子供たちに苦い言葉の呪いを投げつけ」たことであったと説明される[43]。

「不幸な」オイディプスは真相発見のすぐあと，「苦しみに耐えかねて，心が狂って」自分の目をつぶし，さらに息子らに呪いをかける。この状況は，『テーバイス』の場合（第1章B節参照）とは異なる。むしろ，呪いの主体は違うが『オデュッセイア』第11巻の記述に似ていると言えるだろう。ホメロスでは，呪うのは母エピカステであり，オイディプスの目つぶしも起こらない。しかしエピカステは真実を発見したあと，ただちに息子を呪う。第1章A節で述べたように，エピカステの呪いはおそらく母子相姦の忌まわしい罪に対する呪いであり，民話では第1章DおよびE節でみたユダの母親の呪いにパラレルが認められる。真相発覚の直後に息子たちを呪うアイスキュロスのオイディプスもまた，母を妻とした自己の恥ずべき行為と，その不自然な関係から生まれた子供の存在に対する嫌悪と恐怖にとらえられたのであろう[44]。

C．呪いの内容

ところがこの作品中に言及されるオイディプスの呪いは，自己の罪を体現する耐えがたい子孫の消滅を願って発せられたものにしてはいささか奇妙である[45]。その呪いは，3－3では，息子らが「いつか剣をふるう手で，財産を分かち合うだろう」という言葉だったと語られる。この予告は，ポリュネイケスの行為に憤慨したオイディプスが，「息子らが仲良く父の遺産を分け合わず，たえず戦い争い合うようにと祈った」という『テーバイス』断片(2)の呪いとほぼ一致している。

オイディプスが呪いによって遺産の分配をめぐる争いを予言したことは，『七人の将軍』の中で繰り返し言及される。例えばエテオクレスは，父親の呪いに関連した夢の中で「父の遺産を分配する光景」を見たと言い（2－3），また兄弟の相討ちを知らせる使者は，「指導者たる二人の将軍は，鍛え抜かれたスキュティアの鉄で全財産を分け合った。二人は，墓に与えられる土地だけを持つだろう，父親の呪いのままに惨めにも運ばれて」と語る（4）。前者の夢の詳細は不明だが，エテオクレスはそれを思い出し，ポリュネイケスとの対決を遺産分配についての父の呪いの実現として受けとめている。また後者の使者の話でも，「父親の呪い」の結果二人は剣で財産

を分かち合ったという。

『テーバイス』では，呪いは戦争の原因となり，またその物語の結末を予示する役割を果たした（第１章Ｂ節参照)。アイスキュロスにおける呪いもこの機能を継承し，遺産分配の戦争を前触れするものであり，実際その成就が『七人の将軍』で語られる。しかし『テーバイス』ではおそらくオイディプスは再婚後に息子たちを生んだとされ，それゆえ呪いは母子相姦の罪と関係なく戦争の物語へと導いていく。また呪いをこうむる息子らはすでに成人していて，自己の過失によって父の怒りを招く。それに対してアイスキュロスにおいては，明らかに母との間に生まれた子供たちが呪いの対象であり，そのうえ呪いは真実発見の直後のため，彼らはまだ幼く，不浄の生まれである以外みずからは何の過ちも犯してはいなかったであろう。「惨めな結婚に気づい」て「心の狂った」オイディプスは，なぜ息子らに対し，とくに遺産分配の争いを予言しなければならないのか。アイスキュロスの残された悲劇では，その必然性がはっきりと語られていない。

Ｄ．アイスキュロスの革新

呪いの原因（近親相姦）とその内容（遺産分配の争い）の不調和は，たとえ第二部『オイディプス』が現存したとしても，おそらく解消しない問題ではないだろうか。遺産分配をめぐる呪いは，『テーバイス』の作者がオイディプスの人生をテーバイ戦争と有機的に結びつけるために採用したモチーフであった。その際呪いの原因として母子相姦はそぐわず，息子たち自身の過ちが語られた。しかしアイスキュロスは，三部作の統一上，まず①呪われる子供らがオイディプスの実母から生まれた者であり，次に②呪いはその異常な誕生のゆえにかけられた，とする必要があったものと思われる。

そもそもテーバイ王家の不運は，エクソドスでコロスが語るように，アポロンの神託を軽視したライオス王の「神を信じぬ謀りごと」（５－１）に起因する。その事情については，第二スタシモンで触れられている。子をなしてはならぬと神に警告されながら，ライオスは「自己の無思慮に屈し」，「自己の破滅のもと」(moron hautoi）となるオイディプスを生む（742-752)。ライオスの「破滅の運命」(moron: 751）とは，息子が自分を殺害することのみならず（752)，その子が「育まれた母親の神聖な畑にあえて種をまき，血塗れの根を下ろす」(753-756）という出来事をも指している。そしてイオカステの胎内に下ろされた「血塗れの根」（rhizan haimatoessan: 756）は，「畑」である母自身の自殺と「種をまいた」息子の目つぶし，さらに「根」から生まれた二人の子供の殺し合いという三世代の流血事件となって形を現わす。ここでオイディプスと母との交わりは，「狂気の錯乱」(paranoia phrenoles: 756-757）によると言われている[46]。またオイディプスがその交わりを知って目をつぶし，母からなした息子らに呪いをかけたのも，同じく心の狂乱（mainomenoi kradiai: 781）のゆえだとコロスは語る。このコロスの回想のすぐあとには，使者が七つの門での戦いの結果を伝えており，その報告では，アポロン自身が七番目の門での戦闘を支配し，「オイディプスの一族に対して，古えのライオスの愚

考（dysboulias）の決着をつけ」たと述べられる（800-802)。このように物語全体は，ライオスの「無思慮」に始まり，それが必然的にオイディプスの不幸と狂気の行動を招いて，その狂乱の呪いが王家の子孫の滅びをもたらすという筋書きで構想されたと推測される[47]。

こうしたアイスキュロスの悲劇の構想は，『テーバイス』の背後に想定される古い伝承とは基本的に異なっている。ここでは「予言→回避→成就」のパターンの反復による展開の構造は見られず，ライオスの罪とその子孫に対する罰という一つの大きなテーマによって全体が統一されている。この独創的な悲劇の構想の中で，オイディプスの呪いはライオス家滅亡の真の原因を示すものとして，母子相姦と不可分の関係でなければならなかったのである。しかし三部作の完結篇がテーバイ戦争の兄弟対決のエピソードを扱い，それをドラマとして展開する以上，『テーバイス』によってすでに定着していた遺産分配のモチーフはけっして無視できなかったであろう。むしろ第三部でアイスキュロスは，このモチーフを積極的に活用した。その結果呪いの原因と内容の間に上述の不調和が生じたのだが，それは伝承に対する革新がもたらした構造的な問題であろう。もちろん作者は，この問題に気づいていた。そこで例えば，呪いの解釈上焦点となる3－3のコロスの言葉を詳しく見てみよう。

そして［惨めな］養いに立腹し，
子供たちに，ああ，ああ，
苦い言葉の呪いを投げつけた，
いつか剣をふるう手で，
財産を分かち合うだろうと。　(785-790)

まさにオイディプスが呪いをかけた瞬間を観衆に想起させる言葉だが，この個所の「養い」(trophe: 786）という語が従来議論の対象となってきた。この言葉は，「子供の養育」を指すのか，それとも「父の世話」を意味するのか[48]。前者ならば，呪いの原因は母子相姦であり（754行ではオイディプス自身も母の畑＝胎内で「育まれた」etrapheと言われた)，後者を取るなら，呪いは『テーバイス』の断片(3)の場合と同様，息子らが食べ物のことでオイディプスを怒らせたことに起因すると見なされる。しかしここで呪いは，真実発覚直後に起こった「二重の災い」の一つとして語られるから，文脈上明らかに前者の意味を取るべきである。とはいえ，この個所でのtropheの用法がじつに紛らわしいことは事実である。現に『コロノスのオイディプス』1375の古注でさえ，この部分に関して「アイスキュロスは『テーバイス』の作者とほぼ同様の（呪いの）話を語った」と断言している。しかもここでオイディプスは［惨めな］tropheに「立腹した」(epikotos: 786）と言われ[49]，そのあと『テーバイス』断片(2)とほぼ同じ呪いの言葉（遺産分配の争い）が語られるのである。神話に通じた古代の観衆は誰でも，息子に侮られた老父が激怒して呪う，あの叙事詩の印象的な場面を思い浮べたであろう。筆者は，作者が『テーバイス』

との連想を促すtropheという語をここで用いたのは，おそらくこうした混同を意図したうえであったと考える。作者は呪いの原因を示すこの曖昧な言葉を故意に用いて，調和しがたい自己の創意と従来の伝承とを何とか結びつけようとしたのであろう。「養い」の一語によって，話は近親相姦の認識の苦悩から，一挙に遺産相続の叙事詩的文脈に切り替わる。第二部『オイディプス』で呪いの場面があったとするなら，そこでもこのコロスの回想と類似した言葉のトリックによる文脈転換の工夫がなされたに違いない。

E．呪いの成就

さてテーバイ戦争の叙事詩的展開を予想させながら，『七人の将軍』の劇は始まる。しかしアイスキュロスの物語は，前章で述べた古い伝承のように呪いを回避する行動がその実現をもたらすという形では進行しない。オイディプスの呪いは，遺産分配をめぐる争いを予告していたことは確かであるが，『テーバイス』でのようにエテオクレスとポリュネイケスの相互殺害の恐るべき結末を明確な表現で予言した言葉ではなかったと思われる。はっきりと二人の破滅の運命を示す呪いだったなら，息子たちはその実現を免れようと行動するだろう。ところがこの作品の主役エテオクレスは，初めから兄弟と相討ちして死ぬとは思っていない。呪いが暗示する恐ろしい運命は，劇の中でしだいに明らかになる。

この章の初めに挙げた呪いに関する引用を見ると，劇が進むにつれて呪いの内容を示す言葉が詳細になることが分かるだろう。まずプロロゴスにおけるエテオクレスによる最初の言及（1）では，「父の呪いなる強力なエリニュス」がテーバイを滅ぼす恐れが述べられるが，それはまだ漠然とした予感にすぎない[50]。その後呪いについてはしばらく触れられず，籤による割り当てで兄弟同士が第七の門で対決する運命が明らかになった時点から頻繁に言及される。そのとき兄弟との対決の宿命を知ると，エテオクレスは「今こそ父の呪いが成就する時だ」と言う（2－1）。そして「わが父の敵意を含む呪いが成就せんと，乾いた涙なき両眼のそばに座り[51]，あとの死より先の利益を説いている」と語る（2－2）。この言葉は，勇敢に戦って名誉を得たのち死の運命を受け入れようとするエテオクレスの悲壮な覚悟を示している[52]。さらにエテオクレスは，遺産分配の夢について述べ，父の呪いと符合するその悪夢[53]が今現実になったと言う（2－3）。エテオクレスはここで，王位をめぐって兄弟と決闘し滅びることを呪いの成就として受けとめている。実際このとき彼は，第七の門での兄弟の対決を止めようとするコロスに対して，「なぜ滅びの運命に，まだなお媚びへつらう必要があろうか」(704) と述べ，場面の最後では「神々が与えた災いから逃げることはできない」(719) と言い残して決闘の場へ去っていく。エテオクレスは，それまで父の呪いと自分の死とをはっきりと結びつけていなかったが，この場面で初めてその関係を明瞭に意識したと考えられる[54]。とするならば，そもそもオイディプスの呪いは，何らかの――しかし明確でない――形でエテオクレス（または兄弟二人）の死を含意していたはずであろう。

第二スタシモンでコロスは，オイディプスの「苦い言葉の呪い」は二人が剣で財産を分かち合うことを告げたと言う（3－3）。しかしその前にコロスは，「古くより伝わる呪いの最後の決着は重々しい」と述べている（3－2）。ここで「決着」を表わす語katallagai（767）は「和解」をも意味している[55]。またエクソドスでは，コロスは決闘による兄弟の死を嘆きながら，エテオクレスとポリュネイケスが「ついに鉄によって和解した」，そして「この上もない真実を，父オイディプスの恐るべきエリニュスは成し遂げた」と語る（5－2）。ここでは剣によって「和解する」(diellakhthe: 884) ことが呪いの成就として言及されるが，この文脈において剣による和解とは，明らかに決闘によって二人とも滅びたことを指している。

「和解」と「死」とは意外な結びつきである。しかしこの二つの事柄は，すでに決闘の結果を告げる第三エペイソディオンの使者の言葉においても関連づけられている（4）。すなわち使者は，まず兄弟が殺し合ったと報告したあと，「ダイモンはあまりにも二人に公平だった」と言う。ここで「公平」(koinos: 812) とは，「不運な一族を滅ぼす」(813) 運命の厳正な働きを性格づける表現であるが，その具体的な意味合いはこのあと，二人の将軍が「鍛え抜かれたスキュティアの鉄で全財産を分け合った。二人は墓に与えられる土地だけを持つだろう」という言葉で説明される。運命（ダイモン）は，オイディプスの子らの遺産分配に際し「公平」だった。なぜなら，兄弟は相続をめぐって争った結果ともに死に果て，自己の遺体を埋葬する土地の広さだけを平等に割り当てられることになるからである。この遺産分配の決着すなわち「和解」こそ，「父親の呪い」の実現であると使者は最後に付け加える（819）。その後エクソドスにおいても，上述のように「和解」の意味が述べられる。このあとコロスは再び，呪いに起因する王家の不幸を生々しく語っている（5－3）。その最初の言葉「流血の大地に，二人の生命が混ぜ合わされた」とは，血縁（「血のつながる者ら」）の調和が大地に滴った血液の混合によって成就したことを表わす[56]。かつて呪いは息子たちに「和解」の可能性を示し，相続争いを調停する異国の「仲裁者」の出現を予想させた。だがその「仲裁者」とは，じつは他国から攻め寄せた軍隊の「鋭い鉄」（剣）のことであり，結局「財産の悪しき分配者なるアレス（戦争）」が，兄弟の死という「むごい」仕方で「父親の呪いを実現させ」たのである。こうしてコロスは改めて「和解」の意味を明示して，呪いがもたらした悲惨な事態を最終的に総括する。

以上の考察から，オイディプスの呪いは，①息子たちが財産をめぐって争い，「和解」するであろうこと，そして②彼らが遺産を剣で分け合うこと，を告げていたと推測できよう[57]。この二つの事柄は，結局は同一の事実であることが第三部の劇中で判明するが，主役のエテオクレスは，運命を体現する敵将たちの引く「籤」によって自己と兄弟との対決が決定される時まで呪いの真意に気づかない。彼は呪いの示す「和解」が剣（決闘）による相互の死だと知ったとき，滅亡の運命を進んで受け入れて潔く死地へおもむく。この劇的展開の中で，エテオクレスは初め父の呪いを恐れてその実現を回避しようとしたのではないし，またそうしたために呪いの成就を促したわけでもない。実際彼は，重大な対決を知る前のコロスとの対話で「いたずらに狂乱して叫

ぶものではない。それで宿命を逃れることなどできないのだ」(280-281) と述べ，漠然と呪いの脅威を感じながらも戦いの決意を翻そうとしなかった[58]。神託の実現を推進するのは，むしろ運命から逃げまいとする主人公の一貫した意志と，激しく戦闘に向かおうとする彼の意欲にあたかも応えるかのように決定される籤による対決の組み合せである。この籤のモチーフは，おそらく前章で検討したステシコロスの物語から採られたものであろう[59]。ステシコロスの話では，籤は平等な遺産分割を実現させ，兄弟の死を告げた予言の成就を避ける（遅らせる）ために用いられた。そしてこの文学的着想は，予言の回避こそその実現をもたらすというテーバイ戦争の古い伝承の趣旨に適合した卓抜な工夫だった。しかしアイスキュロスの作品では，テーバイ王家三代の悲劇は「予言の回避→成就」のパターンの繰り返しによって展開するのではなく，ライオス王の罪からその三代目の子孫の滅亡までを一つの視野に収めた運命の成り行きが語られる。その展望の中で，「籤」は『七人の将軍』においてアルゴス勢の布陣の方法として使われ，最初のライオスへのアポロンの予言とその子オイディプスの呪いによって前触れされたテーバイ王家の滅びの運命が，都の攻防の中でついに実現する様相を劇的に描く手段となった。またアイスキュロスは，そもそも公平な遺産分配の方法だった「籤」をアイロニックに用い，やはり籤こそが，城門での対決を決定づけ，兄弟双方に死後の埋葬という形の平等な相続をもたらすものとした。こうして意味不明瞭だったオイディプスの遺産分配に関する呪いは，エテオクレスの意志と行動および運命を象徴する籤の結果によって，王家の滅亡という明確な目標を明らかにし，それを成就するのであった。

3．エウリピデス『ポイニッサイ』

『テーバイを攻める七人の将軍』から約半世紀の時を経て，『ポイニッサイ』が上演された。この劇には，さまざまな点で従来の物語に対する改変が見られる[60]。最大の改変は，イオカステとオイディプスが二人の息子の争いの時まで生き残ることである。前者は，息子たちの決闘による死の直後に自殺し，後者は三人の死を知ったのち放浪の旅に出る。つまりオイディプスは，自分の呪いの悲惨な結果として血縁三人の死を目前に見ることになるのである。

オイディプスの呪いの状況に関して言えば，対象が実母との間の子供たちであることを除けば，その時点が息子らの成人後であり，また原因が父に対する彼らの不当な行為である点において『テーバイス』の場合と似ている。すなわちプロロゴスでのイオカステの回想によると，オイディプスは真実発見後に目をつぶしたが，その哀れな父親を，大人になった息子たちは宮殿の部屋に監禁したのであった (59-64)。それは彼らが運命を忘れようとして採った手段だったが，「その仕打ちに心狂った」オイディプスは，「きわめて非道な呪いを」息子たちにかけたのであった (64-67)。その呪いの内容もまた，『テーバイス』断片(2)を想起させる。それは，「鋭い鉄で家を分け合え」という言葉だった (68)。さらに父の呪いに対する息子たちの態度も，第1章で述べた古い伝承の場合と類似しているようである。これについてイオカステは，彼らが呪いの成就を

恐れて，一年毎に交替で王位につくことを取り決め，最初にポリュネイケスがテーバイを去り，エテオクレスが即位したと語る（69-74; cf.473-480)。

このようにエウリピデスは，劇の初めでテーバイ戦争の発端として呪いとそれを回避する行動を語っており，その点では悲劇以前の伝承に従っているように見える。しかし，作品中でその後呪いは，最初の回避的行動が大きな原因となって成就するようには思われない。というのは，予告された争いを避けるための協定として，作者は一年毎の王権の交替という方法を創案しているが，それに従って最初に即位したエテオクレスはその後一度も取り決めを実行せず，一年後に王座を要求したポリュネイケスを追放するため（74-76)，呪いに対する予防措置はほとんど実行されなかったに等しいからである。そもそもこの作品では，遺産争いはもっぱら王権をめぐるものであり，王位は分割することができない。したがって分割不可能な王権は，一年という時間的単位に区切って分かち合うという方策が採用されるが，実際はその「分配」は一度も実施されないのである（それに対し，籤で分配を決定するステシコロスの話にせよ，あるいは兄弟の一方が取り分を分割してもう一人が選択するというヘッラニコスの伝承にせよ，遺産は王権と財産に分けられ，その恒久的な分配によって呪いの回避策はいったん完了する)。つまり『ポイニッサイ』においては，呪いを避ける行動は不完全であり，それはたんに兄弟の一方が他方を追放したままにする契機をなしているにすぎない[61]。

最初の段階で呪いを避ける行動が不完全であるため，第一エペイソディオンでは母親イオカステが二人の息子の調停役として登場する。同様の場面がステシコロスの断片にも語られていたが，しかしエウリピデスでは母は子供らの説得に成功しない。むしろ彼女の仲裁によって，二人の対立はいっそう激化し，戦争は不可避となるのである。そしてその原因として繰り返し強調されるのは，衝突を避けようとしない当事者二人の無分別である。イオカステはまず，挑戦的な態度で現われたエテオクレスに，「おやめなさい。性急は正しい判断を伴わぬもの。ゆっくり話し合ってこそ，最大の知恵（sophon）が生まれるのです」(452-453）と警告する。また彼女は「おまえたち二人に賢明な策（sophon）を忠告しよう」(460）と言う。こうしてまずポリュネイケスが言い分を述べるが，エテオクレスはなお地位を譲ろうとしない。そこで母は再び，「人は経験によって，若者たちより賢明な話（sophoteron）ができるものです」(529-530）と言い，エテオクレスに平等の価値を説く（539-567)。次に彼女はポリュネイケスに対しても，「アドラストスは愚かな（amatheis）恩恵を施しました。都を滅ぼそうとやって来たおまえも分別が足りない（asyneta)」(569-570）と戒め，さらに両者に向かって「無謀な行ないはおやめなさい。二つの無分別（amathia）がぶつかり合うのは，最悪の災いです」(584-585）と訴える。だがイオカステの説得は，結局無力であった。彼女はこの場面の最後に「二人とも，お父様のエリニュスから逃れたくないのですか」と問うが，それに対しエテオクレスは「もう館ごとみな滅んでしまえ」と答え，またポリュネイケスも「すぐにおれの剣は目覚め，血塗れになるだろう」と叫んで(624-625)，両者の対決は決定的となる。

このように『ポイニッサイ』では，呪いの成就は何よりも息子らの「無分別」(amathia) によってもたらされる。そしてまた，彼らが父親によって呪いをかけられたのも，じつは同じ原因によると語られる。すなわち第三エペイソディオンでクレオンに呼び出された予言者テイレシアスは，テーバイ王家の過去の出来事について述べ，オイディプスが目をつぶしたのはギリシア人への見せしめを意図した「神々の賢明なもくろみ」(theon sophisma) だったが，「それを彼の子供らが時の力によって隠そうとし，神々の目を逃れようとしているのは，無分別ゆえ (amathos) の過ち」であり，そのため彼らは父を怒らせ，呪いをこうむったのだと指摘する (870-874)。

息子らが呪いをかけられたのも，また呪いを成就させるのも彼らの「無分別」のためであるなら，他方オイディプスが子供たちを呪うという行為も同様に，父の側の思慮の欠如によるものだったと言われる。例えば上述のようにイオカステは，プロロゴスにおいて夫の呪いを「きわめて非道」(anosiotatas: 67) だと語っているし，また第一エペイソディオンでは，そのためオイディプス自身が，閉じ込められた館の中で涙にくれ，自分の命を断とうとするほど激しく「子供らへの呪いを悔やみ嘆いている」と彼女は言う (331-334)。第二エペイソディオンではエテオクレスも，「父が自分自身に招いた無分別な行為 (amathia)」に言及し，目をつぶしたことと，自分たち子供らを呪いによって殺そうとしていることを挙げている (763-765)。さらに第三スタシモンでコロスは，オイディプスの不運な人生に触れ，彼が母親との結婚後，「呪いによって，子供らを忌まわしい争いの中へ投げ込み，血の不幸を渡り歩く哀れな人になってしまった」と嘆いている (1051-1054)。

ところで劇の冒頭でイオカステは，かつてアポロンがライオスに子供を生んではならないと告げたとき，夫は「欲望に身をまかせて狂気 (bakkheian) に陥り，わたしに子種を播いた」と言う (21-22)。ライオスの神託無視もまた，じつは「狂気」すなわち理性を失った行為であった。このように見ると，初めのライオスによるオイディプスの出産，次にオイディプスの呪い，さらにその呪いの実現は，テーバイ王家三代の人々の「無分別」の表われとして描かれていることが分かるだろう。そしてイオカステは，この三代の男たちの妻あるいは母となった悲運を振り返り，「神々の誰かが，オイディプスの一族を惨めに滅ぼそうとしている」(379) と言う。またオイディプス自身も，最後の場面で父殺しと母との結婚，そして呪いによる息子たちの死と次々に生じた災いを嘆きながら，「わたしはライオスにかけられた呪いを受け取って，子供たちに伝えたのだ。なぜなら神々の誰の仕業でもなく，自分の目や子供たちの命に，あのようなことをみずからたくらむほど，わたしは愚か者ではないのだから」(1611-1614) と苦悩の言葉を述べる。

以上のようにエウリピデスは，『ポイニッサイ』でテーバイ王家の滅びについて語る際，アイスキュロスのように人間を支配する運命の働きには重点を置いていない。オイディプスの呪いとその成就に関しても，強調されるのは人間自身の無分別と自業自得の定めであり，運命に対する回避や対決として物語は展開しない。人間の状況を外側から操るものがあるとすれば，それは

「神々の誰か」(379,1614)，あるいは漠然とした「ダイモン」(352,1607; cf.1556) か「エリニュス」(255,1503)[62]としか表わされないのである。

4．ソポクレス『コロノスのオイディプス』

さてこれまでの考察をまとめてみると，オイディプスの呪いの伝承に関して次のように要約することができるであろう。

1．『テーバイス』を初めとする悲劇以前の伝承では，オイディプスの呪いはテーバイ戦争の話の発端をなし，そこではテーバイ王家の滅亡の物語は，オイディプスの物語と同様，予言(呪い) がそれを回避する行動によって成就するというパターンにもとづいて語られた。

2．しかしアイスキュロスのテーバイ王家をめぐる三部作では，その古い伝承の民話的なパターン反復による語りの方法は用いられず，最初のライオスの罪から最後の子孫の滅亡までの運命の連続性が重視された。その際，息子たちの争いと死を予告したオイディプスの呪いは，明確さを欠く言葉で表現され，その真意が第三部の劇中で判明するとともに，先の世代から続く運命の働きによって成就する。

3．その後エウリピデスの『ポイニッサイ』でも，古い語りのパターンは踏襲されず，三世代の事件を結ぶ一貫したテーマが追究された。そこではオイディプスの呪いの原因と結果は，運命のダイナミックな動きとの結びつきを弱め，むしろ人間自身の無分別と強く関係づけられた。

A．神託と呪い(1) オイディプスとテーバイ人

以上の伝承の流れと変化を見たうえで『コロノスのオイディプス』を概観すると，まず，従来オイディプスの物語とテーバイ戦争の話を結合していた呪いの役割を，これまでのどの作品にも見られない独自な内容の神託が果たしていることに気づく。プロロゴスに登場したオイディプスによると，それは，かつて彼がデルポイで父母に関する不吉なお告げを受けたとき，同じくアポロンが述べた言葉であった。

ポイボスはあの多くの災いを予言したとき，
長い年月のち，旅路の果ての土地に着き，
この休息にいたるとわたしに告げた。そこで
おごそかな女神たちの御座所と客のための宿を見つけ，
その場所で，長い苦難の人生を終える，と。
そして迎えてくれた人々には，わたしが住み着いたことが利益となり，
わたしを追い払い，追放した人々には災いをもたらす，と。
また神はわたしに，これらのことの印として，地震か，

雷鳴か，またはゼウスの稲妻がやって来ると約束した。 (87-95)

場所はアッティカのコロノス。娘アンティゴネとともに長い放浪の旅の末この地に着いた老人オイディプスは，土地の男からそこがエウメニデスの神域だと聞き，ついに神託に告げられた場所に到着したと確信する（44-46)。アポロンの神託は，このようにオイディプスの人生の終わりを予言した言葉であり，主人公はまさに今その成就の時が来たことを知るが，しかし神託の後半はまだ謎めいている。神託の後半の意味は，やがて故郷からもう一人の娘イスメネがやって来て，テーバイでもオイディプスに関わる神託が下ったことを報告する場面（第一エペイソディオン）で一部が明らかになる。イスメネは，エテオクレスがポリュネイケスを追放したため戦争が起ころうとしていると語り，テーバイ人に下った神託を次のように伝える。

あなたはいつか，あそこの人々によって求められるだろう，
死んだときも生きているときも，かれらの安泰のために。 (389-390)

なぜオイディプスがテーバイ人の安泰のために求められるのか。この父の問いに答えて，イスメネは神託に関する次の伝聞を語る。

聞くところでは，あの人々の力はあなたの中に生じるというのです。 (392)

イスメネはさらに，もうすぐクレオンがオイディプスをテーバイの近くへ連れ戻しに来ると言う（396-400)。クレオンのもくろみは，親族殺しの血の汚れゆえテーバイの国内には埋葬できないが，オイディプスの生きた身柄はできるだけ近くに拘束し，死後にはよそで葬られて彼の「怒り」をこうむらないようにすることである（398-411)。つまりテーバイは，アルゴスとの戦争を目前にした今，神託が告げたオイディプスの「力」を自分の側に確保せんとし，さらに彼の死後にも，その「力」を将来の敵に渡して大きな被害を受けるような事態[63]を恐れているのである。そしてこの神託は，デルポイからもたらされたと娘は言う（413)。オイディプスの中に「力が生じる」というこの予言は，昔彼自身が同じくデルポイで受けた上述の神託のうち，自分を迎える者には利益が与えられ，追放した者には災いが来るという言葉に符合する。こうして『コロノスのオイディプス』では，二つの側に告げられたアポロンの神託によって，オイディプスの死の経緯とテーバイ戦争の成り行きとが緊密に結びつけられている。

従来の伝承や作品では，呪いがオイディプスの生涯とテーバイ戦争を関係づけた。それに対しソポクレスは，場面をオイディプスの死の直前に設定し，アポロンの神託によって二つの話題を連結させ同時進行させる。その際テーバイの息子らの王権争いは，父の呪いのゆえではなく「神々の誰かの仕業か罪深い心のせいで」(371) 起こったのであり[64]，オイディプスはまだ子供たち

に呪いをかけていない。つまり戦争の発端は何らかの予言や呪いとは関係なく，漠然とした神の力と息子らの「支配と独裁権力を獲得せんとする邪悪な争いの心」(372-373) が原因である（イスメネによると，血気盛んな弟エテオクレスが兄ポリュネイケスを国から追い出し，そのため兄はアルゴス軍を率いて祖国を攻めようとしている: 374-381)。しかしその後の戦争の行方に対しては，アポロンの神託は大きな影響を与え，また同じ神の神託がオイディプスの死に方を決定する。そして劇では，神託ゆえにコロノスにやって来る戦争の当事者たちと，やはり神託のためにそこを動こうとしないオイディプスとが一つの場所で対立・衝突し，まさにその舞台上の激突の中で呪いがかけられ，アポロンの予言は実現していくのである。それでは，登場人物たちは神託をめぐってどのように思考・行動し，どんな葛藤から呪いが生じるのであろうか。

オイディプスに告げられたアポロンの神託の中で，彼を迎える者には利益が与えられ，追放した者には災いが来るという言葉は，テーバイ人に下った「かれらの力はオイディプスの中に生じる」(en soi ta keinōn...gignestai krate: 392) という神託に対応する。いずれも，幸不幸の運命がオイディプスに依存することを示している。しかし後者の神託の言葉は，解釈において二通りの可能性がある。上の訳はkeinōnを所有の属格と取り，「かれらの力」すなわちテーバイ人の力がオイディプスの中に生じるという意味だが，一方keinōnは目的の属格とも読めるので，「かれらに対する力」すなわちテーバイ人を支配する力がオイディプスに生じるの意であるとも受け取れる[65]。そもそも神託の言葉は曖昧であることが多く，意味を判読するのは人間の役割である。イスメネによると，この神託を受けたテーバイ人のクレオンは，オイディプスを「手中におさめながら (kratosi)，国境の中に足を踏み入れないよう，カドモスの地の近くに置こうとしている」(399-400) という。ここでクレオンは，オイディプスを「支配しよう」(kratosi) としていることが分かる。このことは，クレオンが神託のkeinōn krateを「テーバイ人の力」ではなく，むしろ「テーバイ人に対する力」と解釈していたことを示唆する。なぜなら，もしクレオンがテーバイ人の力はオイディプスにある（依存する）と解していたならば，この老人を国境の外に置いたままにしたのでは，たとえ身柄を拘束しえてもテーバイの国内には求めるべき「力」は存在しないことになるが，他方オイディプスにあるのは「テーバイ人に対する力」と彼が解釈したとするなら，そのような脅威の力が内在する人物を国内には入れず，国外の至近距離の土地に拘留するという措置は当然であり，十分納得できるからである。テーバイにとって，自国の運命を左右する力を秘めたオイディプスは，国の「安泰のために」もちろん外国や敵の手中にあってはならない。だが，さりとて「支配力」のある彼を帰国させ，王位をめぐって抗争中の彼の息子らの地位をさらに揺るがすわけにはいかないのである。イスメネは，父の死後については「親族の流した血」(407) のため国内での埋葬は許されないと言いながら，なぜ父が生前に神託 (389-390) どおり帰国できないのかは述べていないが，それは以上の理由によると思われる[66]。イスメネはさらに，テーバイ人はオイディプスが「自分の身柄を思いどおりにする」(sautou kratois) ことがないように，彼を国のそばに置いて味方にしておこうとしているのだと言う

(404-405)。この言葉もまた，テーバイ人がオイディプスを支配する立場に立ち，彼の「支配力」を無効に帰そうとする彼らの意志を示している。

娘の情報をもとに以上の事態を理解したオイディプスは，「それならわたしは，けっしてかれらに支配されはせぬぞ（emou me kratesosin)」(408) と言う。一方彼自身に告げられた神託では，オイディプスは自分を追放した者には災いをもたらすだろうと述べられた。すでにエウメニデスの神域に到着したことを確認した主人公にとって，テーバイでの新たな動向は，神託における目的地到着以後に関するこの言葉の意味を照らしだす。彼はイスメネに，「それでわが息子らのどちらかが，その話（神託のこと）を聞いたか」と問う (416)。神アポロンがオイディプスをテーバイの安泰のために求めよと指示したのなら，子供としては悲惨な境遇の父の追放を解除し，すぐさま祖国に召還すべきであろう。しかし彼らは，神託を知りながら，「父を想う気持ちよりも，王権を優先させた」(418-419)。息子らは，同じく神託が示すテーバイに対する父の「支配力」(kratos) を恐れて帰国を促さず，自分のための「王権」(tyrannida: 419) 獲得に腐心している。オイディプスは，彼らが父の「力」を奪い，王位をわが物にするため改めて父の追放を容認したと推理する[67]。神託の示す目的地に着いた主人公には，もはやテーバイへ帰る気持ちはないだろう。彼の心を突き動かすのは，激しい怒りである。オイディプスはここで，再度自分の追放を認めた子供らに対して呪いの言葉を放つ。

ならば神々が，かれらの宿命的な争いを
消すことがないよう。今やかれらが身を投じ，
槍を振り上げているその戦さの決着は，
わたしにつけさせてもらいたい。
今王笏と王座を握る者は，それを維持せず，
外に去った者は，もはや二度と帰らぬように！ (421-427)

これは，追放した者に災いをもたらすという神託に一致した呪いである。また「戦さの決着はわたしにつけさせてもらいたい」(en d' emoi telos / autoin genoito tesde tes makhes peri: 422-423) という言葉は，「力はオイディプスの中に生じる」(en soi ta keinon...gignestai krate: 392) というテーバイ人が受けた神託の文とも呼応している。このあとオイディプスは，かつて息子たちが追放される父を見離したことを語り (427-447)，「あの二人は，生みの親よりも，王座をえて王笏をふるい，国に君臨するほうを選んだ」(448-449) と言う。だがこうして甦る昔の怒りは，じつは現在も変わらぬ息子らの父に対する過酷な態度への憤激でもあり，まさにこのオイディプスの激怒こそが，上の二つの神託を成就させることになる。「追放された」彼の「中にテーバイ人に対する力が生じ」，追放した人々に災いをもたらすという事態は，怒れる老人の呪いという行為自体においてすでに起こりつつある。続けてオイディプスは，「息子たちはわ

たしを味方にして何かを得てはならない」(450) と言う。これはオイディプス自身の強い意志であると同時に，神託の示すところである。老父を支配下に置いて，彼らは遺産の王権を獲得することはできない。「けっして支配されぬ」(408) ことによって，忘恩の子供らに「カドモスの国の統治から何の益も与えず」(451-452)，災いのみを彼らにもたらす。それが，「力はオイディプスの中に生じる」という神託の真意であり，また彼自身も理解したと信じる二つの神託の意図であった (452-454)。

こうして初めの神託の一部が明らかにされたのち，エウメニデスへの嘆願の儀式が行なわれ (461-509)，やがてアテナイ王テーセウスがオイディプスを迎える (551ff.)。オイディプスは，自分の体はテーセウスへの贈り物であり，死後に埋葬してくれたときその利益が現われるが (576-582)，しかしそのためには，自分を連れて行こうとする息子たちから身を守ってくれる必要があると言う (587-589)。息子らは彼を追い出したのに，なぜ連れ戻そうとするのか。このテーセウスの質問に答えて老人は，「神の言葉がかれらにそうさせるだろう」(603) と言う。すると，テーセウスはさらに問う。

かれらは神託ゆえに，どんな災いを恐れているのだ？ (604)

神託のために子供らが父を求めることになると知ったテーセウスが，このように尋ねるのは奇妙である。オイディプスはまだ神託の内容については何も言っていないから，普通ならまず，どんな神託のためだと問うべきだろう。テーセウスの質問は，オイディプスの子らが神託の「災いを恐れている」ことを前提にしており，これは飛躍した問いかけである。しかしこの論理の飛躍は，そのあとの劇の展開を方向づける。オイディプスはテーセウスに答えて，「かれらがこの土地で，打ち破られる定めにあるからだ」(605) と言う。この返答からテーセウスは，テーバイ人とアッティカとの争いを想像し，またオイディプス自身も，先に自己の埋葬がもたらす利益について語ったので，将来コロノスで起こる両国の武力衝突と，死霊となった自分の働きについて予告する (608-623)。だがオイディプスの返答 (605) は，現在の事態をも視野に置いた言葉であろう。なぜなら彼は，自分をアッティカに住まわせることに決め，早速館に招こうとするテーセウスに対して，コロノスにこそ自分は住みたいと申し出て (644)，その理由として「この場所で，わたしを追放した者どもを打ちひしぎたいのだ」(646) と語るからである。「追放した者を打ちひしぐ (krateso)」という言葉は，先に娘の前で述べた「かれらに支配されはせぬ (emou me kratesosin)」(408) という固い防御の姿勢からさらに進んで，主人公がより積極的な攻撃の態勢に移ったことを示している。この言葉に対して，神託を正確に知らないテーセウスは「あなたが一緒にいることは，大きな恩恵になるだろう」(647) と述べ，なお遠い未来の状況を想定している。しかし今にもやって来る脅威からテーセウスの保護の保証を執拗に確認しようとするオイディプス (648-667) は，まもなく起こるクレオンとの争いを強く意識している。

前述のようにクレオンは，「テーバイ人に対する力はオイディプスに生じる」という神託のためにコロノスへやって来る。彼は，テーセウスが推測したように，その神託の災いを恐れ，その成就を回避しようと来るのである。自国を支配する力を持つオイディプスがアッティカにいれば（あるいは埋葬されれば），現在と未来においてテーバイに災いとなる。それを防ぐため（つまり国の安泰のために），クレオンは言葉でも暴力でも，ともかくオイディプスを束縛し「支配」しなければならない。一方オイディプスにとってクレオンの到来は，テーバイ人が「この土地で打ち破られる定め」(605) を避けようとする行動であり，それは神託にもとづくかぎり成功しないし，また成功させてはならないものである。

クレオンは最初，国境の外での拘留の意図は隠し，悲惨な放浪の境遇に同情するふりをして，老人に帰国を勧める (728-760)。それに対しオイディプスは，第一声より激しい罵倒を浴びせかけ，相手の真意を暴露する (761-786)。そして老人は怒りに駆られて，クレオンと息子たちに激しい呪いを投げかける。

そうはいかぬぞ。おまえにはこうなるのだ。あそこでは，
国へのわたしの怨霊が永遠に住みつく。
またわが子供らには，わたしの土地のうち
獲得できるのは，ただそこで死ねるだけの広さだけだ。 (787-790)

この呪いによってオイディプスは，「自分を追放した者を打ちひしぐ」。その呪いの言葉には，将来のアテナイとの紛争でテーバイが敗れ，また現在の王権をめぐる争いで二人の兄弟が死ぬことが予示される。このような事態（とくに後者の結末）は，たんにオイディプスがテーバイ人らによって「支配されない」(408) ため，すなわち彼らがこの老人の身柄を拘束できないゆえに起こるのではない。「支配されるまい」という主人公の意志からは，王権争いが永遠に解決しないようにという呪いが生まれた (421-427)。しかしここでは，二人の息子の死といういっそう悲惨な結果が前触れされ，その不幸な両者の死による相続争いの収拾が予告されている。「追放した者を打ちひしぐ (krateso)」とは，呪いによって息子らの死の運命までも決定づけることであった。まさにこの呪いは，むしろテーバイを支配しうるオイディプスの「力」(kratos) の顕現であることが分かる[68]。ここでは主人公みずからその「力」を意識していて，自分の「怨霊」(alastor) はテーバイに住みつき，死後も故国を支配し続けるだろうと言う。

老王クレオンは，しかしそのままでは引き下がらない。彼は暴力に訴えて娘たちを捕らえ，強引にオイディプスを連れて行こうとする (816-864)。クレオンが相手の激しい言葉に表われた「支配力」(kratos) に圧倒されたことは，「おまえは祖国と自分の親しい者らを打ち負かし (nikan) たいと思っているのだから，打ち負かすがよい (nika)」(849-852) と口惜しそうにいう言葉から明白である[69]。オイディプスは卑劣な手段を使うクレオン自身とその一族にも，悲

惨な老年が訪れるようにと呪う（864-870)。さらにクレオンは駆けつけたテーセウスに対し，両親への罪に汚れたオイディプスに国家的保護を与えるのを断念させようとするが（939-950)，主人公は自己の潔白を強く主張し，敵の言動の非を訴える（960-1013)。結局娘たちはテーセウスによって救われ，クレオンのもくろみは失敗に終わる。

さてそもそもクレオンは，オイディプスのテーバイに対する「力」を恐れ，神託が成就しないようにと願ってコロノスに来た。しかし神託を無効にし，オイディプスの「支配力」を手なづけようとする彼の試みそのものが，かえって相手の激しい怒りを触発させ，テーバイ王家にとって最も不幸な呪いを招く[70]。その際呪いは，神託で予言されたオイディプスの「支配力」の表出にほかならず，恐ろしい呪いの言葉それ自体が神託実現の重要なプロセスとなっている。クレオンの神託回避の努力は，結局神託が告げたオイディプスの「力」を証明するという結果を招くのである。クレオンはまた，オイディプスに対する「支配」を暴力的に行なおうとした。これは主人公の「力」を無に帰するための最後の方法だったが，しかしその行動がテーセウスを前にした二人の老人同士の論争を引き起こし，ついにオイディプスに熱烈な自己弁護と痛烈な弾劾の演説の機会を与える。そして最後には，演説に説得されたテーセウスがクレオンの策略を軍事的に阻止することになり，再びオイディプスの「力」が予言どおりに発揮されるとともに，将来のテーバイ対アテナイの紛争を待つまでもなく，コロノスでのテーバイ人敗退の神託はすでに今ここで成就するのである（ちなみに第二スタシモンでコロスは，娘たちを取り戻すテーセウスの騎兵隊の行動を「戦争」として語っている: 1044-1095)。

B．神託と呪い(2) オイディプスとポリュネイケス

クレオンが去ったあと，今度はポリュネイケスがコロノスへ来る。ポリュネイケスはエテオクレスによってテーバイから追放され，そのためアルゴス軍を率いてテーバイを攻め，弟から王位を奪うつもりである。しかしポリュネイケスは，その戦争に勝つためには父の協力が必要であることを神託によって知る。オイディプスの方もまた，テーセウスの話からポリュネイケスがポセイドンの祭壇で父と会えるよう嘆願していると分かったとき，息子の「忌まわしい」目的を予感する（1177)。老人は初めポリュネイケスとの面会を拒否するが，兄を想うアンティゴネの懇願に折れる。しかしオイディプスは息子が自分をむりやり連れて行くことを強く警戒していて，テーセウスに「誰にも，わたしの命を思いどおりにさせないでくれ」(medeis krateito tes mes psykhes pote: 1207）と念を押したうえで会うのを承諾する。

父の前に現われたポリュネイケスは，老父の悲惨な放浪の姿を見て哀れみ，自分は何の世話もせず困窮の生活を放置していたと謝罪する（1254-1266)。しかしオイディプスが何の返答もせず黙っているので，自分から来訪の目的を話す。彼は弟との政権争いの経緯を説明し（1284-1325)，「わたしを追放し，祖国を奪った弟に復讐せんと立ち上がったこの男に対して，激しい怒りを抑えてください」と嘆願する（1327-1330)。ポリュネイケスはその嘆願の理由について，次の神託

を聞いたからだと言う。

もし神託が，少しでも信頼できるなら，
力はあなたが味方につく人々にある，と聞きました。 (1331-1332)

「力はあなたが味方につく人々にある」は，hois an sy prosthei, toisd'...einai kratosの直訳である。普通「勝利（kratos）は，あなたが味方する側のもの」と訳されている[71]。しかしこの神託の言葉は，先にイスメネが報告した「力はオイディプスの中に生じる」というアポロンの神託と突き合わせてみる必要がある。ポリュネイケスが語る神託は，後者の神託の文句を彼の立場から解釈したものであろう。その解釈は，前節で述べたクレオンの側の解釈と似ているようである。クレオンは神託を，「テーバイ人に対する力がオイディプスの中に生じる」と解し，その事態を回避しようとした。そしてその方法は，「オイディプスを国のそばに置いて，味方にしておく（se prosthenai)」(404-405）ことであった。そうすることで，クレオンは「力」のあるオイディプスを支配下に置き，テーバイの「安泰」を守ることができると考えたのである。一方ポリュネイケスによると，神託は「オイディプスが味方につく者に（hois an sy prosthei)，力がある」と理解されるのだから，その解釈は，クレオンがオイディプスを「味方にする」(se prosthenai）ことによってテーバイの支配を保持できると考えたのと同一の思考にもとづいている。いずれも，「力はオイディプスの中に生じる」という元来の神託の言葉を自分の立場から判断し，「力」のあるオイディプスを支配すること（kratein）によって，自己の「力」(kratos）を確立しようとする。ただしポリュネイケスがクレオンと異なる点は，後者がオイディプスの持つ「力」をテーバイ人に対する支配力ととらえて，老人を国の外に置こうとしたのに対して，前者はテーバイ政権と敵対する立場から，支配権を得たのち父を自分とともに帰国させるつもりだと述べていることである（1342-1343)。しかし，もちろんポリュネイケスは，テーバイを支配すべき者は自分であると見なしており（1343)，父親を王位に復帰させようとはまったく思っていない[72]。彼はクレオンと同様，オイディプスが「味方する」(すなわち服従する）側に「力がある」と信じ込み，そのように解釈した神託の言葉をひたすら利己的に実現しようとしているだけである。もとより観衆は，「支配力」はまさにオイディプス自身の「中に（en）生じる」というテーバイ人に下ったもとの神託を知っている。観衆にとってポリュネイケスの父への嘆願は，そのアポロンの予言の成就を回避しようとする行為にほかならないであろう[73]。

ポリュネイケスの嘆願は，ようやくオイディプスの口を開かせる。だが彼が父から受け取る返答は，凄まじい怒りである。すなわちオイディプスは，以前王座にありながら自分を追放して惨めな流浪の生活を強いた息子を激しく非難し（1348-1369)，ポリュネイケスを「人殺し」だと罵ったあと（1361)，息子は二人とも「わたしの子ではなく，他人から生まれた子だ」と宣言する(1369)。息子たちはオイディプスの遺産の王権を当然の権利として争っているが，父親自身はこ

こで，二人の相続の資格をきっぱりと否定するのである。親不孝のポリュネイケスは，「ダイモンに見据えられ」(1370)，すでに「物乞いと流れ者」(1336) の境遇を味わうことによって罪の報いを受けている[74]。しかしまだそれにも懲りず，彼が「もし軍勢をテーバイに進軍させるなら」(1371-1372)，運命の神（ダイモン）はいよいよ取りついて離れず，彼は国を滅ぼすことができぬどころか，兄弟と一緒に互いの血にまみれて倒れるだろう（1372-1374)。オイディプスは，すでにイスメネとクレオンの前で放った呪いの言葉（425-427,789-790）をここで一つに凝縮し(1375-1376)，ポリュネイケスに対し忘恩への憤りを込めて（1377-1379）投げつける。

クレオンとの場面と同様，オイディプスの怒りは「彼の中に生じる」と神託が告げた「力」(kratos) そのものである。彼の激しい怒りは呪いの言葉として噴出し，「支配力」はオイディプスが「味方する」者にあるのではなく，彼本人にのみ内在することを示す。そしてオイディプス自身，自己の内に起こる激情の必然性と神託の正しさゆえにその「力」を確信していて，次のように述べる。

だからわたしの呪いは，おまえの嘆願とおまえの王座を
支配するのだ，もし太古に示された正義の女神が，
昔からの掟にしたがって，ゼウスのそばに座るならば。 (1380-1382)

アポロンの神託は，ゼウスの意思を伝えるものと言われる。古来最高神の意思が正義にもとづくのなら，その神託に従って，オイディプスこそが呪いによって息子を「支配する」(kratousin: 1381) ことは正当である。クレオンに対してと同様，ここでも主人公は神託どおりに，「自分を追放した者を打ちひしぐ（krateso)」。老人は，ポリュネイケスは「忌み嫌われた者」(敵）であり，自分は彼の父ではないと言い（1383)，再び同じ呪いを投げかける。

おまえは血縁の土地を
槍で支配できないし，またけっして盆地のアルゴスへ
帰ることもない。むしろ兄弟の手にかかって死に，
そして自分を追放した者を殺すのだ。 (1385-1388)

ポリュネイケスは祖国を「支配できず」(mete kratesai)，兄弟と討ち合って滅びるだろう。その滅びの運命をもたらすのは，オイディプスの呪いの「力」である。続いて主人公は，息子が住むべきタルタロスの闇と復讐神エウメニデスおよび戦争の神アレスを呼び，「オイディプスが息子らに，このような褒美を分かち与えた」(1395-1396) と戦争の仲間に告げよと締めくくる。「褒美」(gera: 1396) という語は，『テーバイス』断片(2)でポリュネイケスが勝手に父のそばに置いたテーバイ王家の「見事な贈り物」(timeenta gera) を想起させる。またオイディプスは，

二人の兄弟は我が子ではないと宣告していた（1369; cf.1383)。こうしてポリュネイケスへの彼の最後の言葉は，彼らが父から相続すべき遺産としては，二人の死以外には何もないということを示している[75]。

そもそもポリュネイケスは，嘆願者として父の前に現われながら，じつは父を支配し，擁護者の立場に立とうとしていた（cf.1342-1343）[76]。彼のもくろみは，父親の権威を尊重するように見えても，実際は「力はオイディプスの中に生じる」という神託を避ける方向にむかう。そして彼は嘆願によって父親の「力」を支配しようとして，かえって父の怒りを招いて恐ろしい呪いの「力」に支配されてしまい，結局回避しようとした神託の真実をみずから明らかにする。このあとポリュネイケスとアンティゴネの会話では，神託の成就がもはや避けがたいものとして示される。ポリュネイケスは嘆願の失敗を嘆き（1399)，戦さの敗北の結末を思いながら「黙ってこの運命にぶつかるしかない」(1404）と語る。激しい呪いによって示されたオイディプスの「力」は，クレオンの場合とは異なって反論の意欲を完全に奪ってしまったのである。アンティゴネは，軍勢をアルゴスに引き返すことによって破滅を回避できるが，それでも戦うならば父の呪いは実現するだろうと言う（1416-1417, 1424-1425)。それに対しポリュネイケスは，「父とエリニュスたちが定めた不運と災いの道を進んで行かなければならない」(1432-1434）と頑迷に警告を退け，滅亡への道を突き進んでいく。ポリュネイケスは父親の呪いの「力」を，自己の性格と意志によって証明することになるのである[77]。

C．結び

ソポクレスは『コロノスのオイディプス』において，オイディプスの生涯とテーバイ戦争とを結びつける要素として，従来の呪いの代わりに神託を採用した。その際，目前に迫る戦争の当事者たちと死の直前のオイディプスが，各々に下されたアポロンの神託をめぐって対峙する。この構図の中で，テーバイ戦争に関わるクレオンとポリュネイケスはいずれも，「オイディプスの中に力が生じる」という神託にもとづいてオイディプスを支配下に置こうとして，その神託の真の成就を回避しようとする行動を取るが，一方アポロンの予言を回想してコロノスで死ぬ定めを悟ったオイディプスは，かつて自分を追放した者たちの利己的なもくろみを見抜き，彼らに支配されまいとする。オイディプスの抵抗は他方，彼を迎えた者（アテナイ人）には利益を，追放した者（テーバイ人と息子たち）には災いをもたらすという同じくかつてのアポロンの神託によって予告されていた。劇全体は，双方に下った神託が，登場人物の対立の中でどのように実現していくかという点を中心に展開する。

クレオンとポリュネイケスは，オイディプスとの対立の場面でどちらも主人公を激しく怒らせる。彼らはオイディプスを支配しようとし，そのため激怒した彼によって逆に恐ろしい呪いをかけられて支配される。「オイディプスの中に力が生じる」という神託の真意を無視し，彼を支配した側に「力」はあると信じた行為が，むしろ神託の正しい理解を明らかにして，それを成就さ

せるのである。もしも二人がオイディプスを支配して「力」を得ようとしなかったなら，彼らは「力はオイディプスの中に生じる」という神託どおりに主人公を憤慨させて，破滅を宿命づけられることもなかったであろう。

ところで，運命の逆転を含むこうした成り行きは，悲劇以前のテーバイ伝説では，不幸な戦争の結末について予告した呪い（または予言）を回避する行動が，かえってその成就をもたらすという語りのパターンに認められた。悲劇作者アイスキュロスとエウリピデスはオイディプスの呪いについてこのパターンを用いなかったが，ソポクレスはこの民話的パターンを，『オイディプス王』で主人公の誕生から親に対する罪の発覚までの物語に取り入れ[78]，さらに『コロノスのオイディプス』においても，その後のオイディプスの死と一族の滅亡をめぐる話の中に応用したものと思われる。悲劇以前の古い伝承では，「宿命の子」としてのオイディプスの物語と同じ構造（運命の予告→回避→成就）がテーバイ戦争の話の中でも反復され，物語全体を貫くモチーフとして運命の不可避性が強調された。ソポクレスもまた，同様のパターン反復によってオイディプス神話を完結させたのである。しかし『オイディプス王』において神託が親と子の両方に対して別々に告げられ，その結果運命に翻弄される「宿命の子」オイディプスが民話的タイプを逸脱して「宿命を知る子供」になったように[79]，『コロノスのオイディプス』でも神託は二重に下され，一方で神託の真意を無視した人々が運命を回避しようと行動するのに対して，他方主人公オイディプスは神の意図を正確に認識し，神託の実現に決定的な役割を果たす。そこでオイディプスの呪いは，彼の恐ろしい「力」を具現するものして，ほとんど神託の成就に等しい意味を担うことになった。それゆえ運命は，この作品では「籤」のような外在的な原因によって定まるのではない。神託を受けた二人の登場人物がオイディプスの尊厳を傷つけ，そうした人間的な動機のために，主人公の内側から激しい怒りの力が呪いとして現出して，現在と未来の状況を決定するのである。劇の最後でオイディプスは，コロノスの地一帯に雷鳴が轟くなか，エウメニデスの神域の中に姿を消していく。はたして彼は神の国に旅立ったのか，それとも地下の死者の国へ下ったのか，いずれとも判明しない（1661-1662）[80]。だがオイディプスが，「宿命を知る子供」からさらに「宿命をもたらす者」に変貌して，恐るべき女神たちに迎え入れられたことは確実であろう[81]。

（1999年9月29日脱稿）

付記——小論が印刷中の2000年3月3日，岡道男（京大名誉）教授が他界された。小論は，前稿「オイディプスと神託」と同様，オイディプスの神話に深い関心を持ち執筆を励ましてくださった岡先生に，まず読んでいただくことを期して作成された。それが，思いも寄らない運命のため，叶わなくなってしまった。筆者にはまだ，感謝の言葉が届かないほど，先生が遠くに往かれたとは信じられない。きっと明日もまた，心の郵便箱に先生からの返信を探すことであろう。謹んでご冥福をお祈り申し上げる。

注

(1) 小川正廣「オイディプスと神託——ギリシア悲劇と民話——」,『名古屋大学文学部研究論集』133 (1999), pp.15-44.

(2) 『テーバイを攻める七人の将軍』1004参照。

(3) 『コロノスのオイディプス』1375で オイディプスは「以前に」息子たちに呪いをかけたと言う。しかしこの言葉は，かつてテーバイで呪いをかけたことを意味しない。オイディプスは同じ劇の前の場面で放った呪い (421-427あるいは789-790: 本論第4章A節参照) について言及したものと考えられる。Cf. R.C.Jebb (ed.), *Sophocles. The Plays and Fragments, II, The Oedipus Coloneus*, Cambridge 1928, p.xxv, p.212-213, ad loc.; J.C.Kamerbeek (ed.), *The Plays of Sophocles, VII, The Oedipus Coloneus*, Leiden 1984, ad loc.; I.M.Linforth, Religion and Drama in "Oedipus at Colonus", *University of California Publications in Classical Philology* 14 (1951), p.163; R.P.Winnington-Ingram, *Sophocles. An Interpretation*, Cambridge 1980, p.266-267, n.50; J.P.Wilson, *The Hero and the City. An Interpretation of Sophocles' Oedipus at Colonus*, Ann Arbor 1997, pp.160-161.

(4) A.L.Brown (Eumenides in Greek Tragedy, *CQ* 34 (1984), p.281) は,『コロノスのオイディプス』1299でポリュネイケスが戦争の原因として述べる'ten sen Erinyn'を「オイディプスの怨霊」と解釈して，1375の「呪い」と関連づけている。しかしむしろこの語句は，漠然とオイディプス（とその一族）に迫る復讐神の働き (cf.964-965) を暗示しているにすぎないであろう。Cf.Jebb, op.cit., p.xxv, p.203, ad loc.; Kamerbeek, op.cit., ad loc; Linforth, op.cit., p.158; Winnington-Ingram, op.cit., p.267, n.50.

(5) この作品の呪いに関する従来の議論について述べたものとしては，cf. C.H.Whitman, *Sophocles. A Study of Heroic Humanism*, Cambridge, Mass. 1951, pp.211; Linforth, op.cit., pp.75-129; T.G.Rosenmeyer, The Wrath of Oedipus, *Phoenix* 6 (1952), pp.92-112; G.M.Kirkwood, *A Study of Sophoclean Drama*, Ithaca/London 1958, pp.61-62; P.E.Easterling, Oedipus and Polynices, *PCPS* 13 (1967), pp.1-3; G.Ronnet, *Sophocle: poète tragique*, Paris 1969, pp.307-312; M.W.Blundell, *Helping Friends and Harming Enemies. A Study in Sophocles and Greek Ethics*, Cambridge 1989, pp.253-259.

(6) ただし『コロノスのオイディプス』中の神託の考察として，Linforth (op.cit) とWilson (op.cit.) の論考は参考になる。

(7) オイディプスは劇中にダイモン化するという興味深い解釈もある。Cf. C.M.Bowra, *Sophoclean Tragedy*, Oxford 1944, pp.309-355; 川島重成『ギリシャ悲劇の人間理解』，新地書房 1983, pp.361-399. またT.G.Rosenmeyer (op. cit.) は，息子らに呪いをかけることによってオイディプスは汚れから浄められ，最後に英雄として神聖化されると言うが，これは極端な宗教劇的解釈である。

(8) この一節についてはすでに前稿で若干の解説を行なった (小川, op.cit., pp.19-20).

(9) Cf. A.Heubeck & A.Hoekstra, *A Commentary on Homer's Odyssey*, II, Oxford 1989, p.94, ad 279-80.

(10) Cf. 岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』，創文社 1988, p.390; E.L.de Kock, The Sophoclean Oidipus and Its Antecedents, *AClass* 4 (1961), p.9; J.R.March, The *Creative Poet*, London 1987, p.122.

(11) Cf. 岡, op.cit., p.392; March, op.cit., pp.122-124; H.C.Baldry, The Dramatization of the Theban Legend, *G&R* 3 (1956), pp.26-27.

(12) 『オデュッセイア』11, 274の古注: 'ouk eutheos; epei pos eskhe paidas; alla exaiphnes'; cf.小川, op.cit., pp.20. 「ただちに」の意に取らない解釈としては，cf. 岡, op.cit., p.390; W.B.Stanford, *The Odyssey of Homer*, London 1959, p.391, ad 274; Heubeck & Hoekstra, op.cit., p.94, ad 274.

(13) その可能性については，cf. 岡, op.cit., p.390.

(14) Cf. M.Davies, *The Epic Cycle*, Bristol 1989, p.26; March, op.cit., p.126.

(15) Cf. 岡, op.cit., p.391; de Kock, op.cit., p.19-20.

(16) de Kock (op.cit.) は，親に対する罪の汚れ (agos) ゆえに退位させられたオイディプスが，王家の財産に気づき，父ライオスの殺害を思い出したため激怒したと言うが，『テーバイス』でオイディプスが宗教的汚れとして扱われたことを示す根拠はない。

(17) Cf. Baldry, op.cit., p.29; March, op.cit., pp.125-126（ただし，いずれもこの伝承がホメロスに遡るとする点では，筆者の見解と異なる）.

(18) Cf. R.Aélion, *Quelques grands mythes héroïques dans l'œuvre d'Euripide*, Paris 1986, p.65.

(19) 断片のテクストは，M.Davies (ed.), *Poetarum Melicorum Graecorum Fragmenta*, Vol.I (Oxford 1991, pp.213-218) に収録のもの。また注釈付きテクストとして，P.J.Parsons, The Lille 'Stesichorus', *ZPE* 26 (1977), pp.7-36も参照。なお断片の作者がステシコロスであることについては，cf. M.L.West, Stesichorus at Lille, *ZPE* 29 (1978), pp.1-4.

(20) Cf. March, op.cit., p.131.

(21) A.Gostoli (Some Aspects of the Theban Myth in the Lille Stesichorus, *GRBS* 19 (1978), pp.23-27) は，エウリピデスの『ポイニッサイ』に先立ってステシコロスが最初にイオカステ（エピカステ）を生き残らせた可能性を示唆しているが，March (op.cit., pp.127-131) は，イオカステが生き残るのは『ポイニッサイ』が最初であるとする。筆者の考えでは，エウリュガネイアは前述のように，オイディプスの呪い→テーバイ戦争の発生という物語の発展の中で出現した人物であるから，呪いが予言に置き換えられたステシコロスの話でもやはり，オイディプスの子供たちの母親として登場したと思われる。

(22) Cf. 小川, op.cit., p.24.

(23) Cf. Gostoli, op.cit.

(24) Cf. Parsons, op.cit., p.20; Gostoli, op.cit., p.26; W.G.Thalmann, The Lille Stesichorus and 'the Seven against Thebes', *Hermes* 110 (1982), pp.385-391.

(25) この伝承は，アポロドロス『ビブリオテケ』3.6.1とディオドロス・シクロス4.65.5にも記されている。

(26) Cf. March, op.cit., p.135.

(27) Cf. March, loc.cit.

(28) 小川, op.cit.. なおソポクレスの『オイディプス王』では，同一のパターンがオイディプス自身の神託をめぐる話にも用いられた。この作品の構造的特徴については，岡道男が精緻な考察を行なった（「オイディプースと真実」,『ギリシア悲劇とラテン文学』第1部第1章，岩波書店 1995, pp.3-119).

(29) なお異伝として，『ポイニッサイ』13の古注には，神託で息子たちが殺し合うことを知ったオイディプスが幼い彼（ら）を捨て子にするという後代の伝承が記されている（リュシマコスおよびカストルの伝：*FGrH*, 382F20, 250F18; cf. Aélion, op.cit., p.65, n.156)。ここにも民間伝承に由来する同じパターンの反復の技法が認められる。

(30) 小川, op.cit., pp.28-33.

(31) この伝承記録の英訳は，L.Edmunds, *Oedipus. The Ancient Legend and Its Later Analogues* (Baltimore/London 1985, pp.186-187, 188-192) に収録。

(32) グレゴリウス一世: Edmunds, op.cit., pp.79-88; 聖アルバヌス: A.H.Krappe, Is the Legend of Oedipus a Folktale ?, in L.Edmunds & A.Dundes (ed.), *Oedipus. A Folklore Casebook*, New York 1983, p.126.

(33) Edmunds, op.cit., p.37.

(34) ユダの諸伝承は，Edmunds (op.cit.)に英訳で多数収録されている。また小林標「ラテン・ロマンス諸語における《ユダ／オイディプース説話》」（『地中海学研究』18 1995, pp.25-51）は，ロマンス語の伝承まで考察したものとして貴重である。

(35) Cf. Edmunds, op.cit., pp.61-62; 小林, op.cit., pp.28-31.

(36) 'qui totius gentis nostrae causa perditionis exsisteret'(Jacobus de Voragine, *Legenda Aurea*, 45: De Sancto Mathia Apostolo)

(37) Edmunds (op.cit.) 収録のユダ伝のうち，GK1,GR1,GR2,GR3,FI13,IR1,IR2,RS3.

(38) Cf. 小林, op.cit., p.30, p.47, n.15.

(39) とくに赤子の脛に串を刺して薮（林）に捨てる点（cf. 小林, op.cit., p.29-30)。

(40) 小林 (op.cit., p.31) は，「悔悟するユダという文脈の直後に盗みをするユダという話が来るのはいかにも唐突である」と指摘している。筆者はこの不自然さを，最古のユダ伝の写本に反映した運命観と結びつけたい。

(41) Cf. V.Propp, Oedipus in the Light of Folklore, in Edmunds & A.Dundes (ed.), op.cit, pp.114-118; Edmunds, op.cit., pp.36-39.

(42) ステシコロスの話でテイレシアスの予言は，「AかBが起こる」という形だったが，意味は明快であった。

(43) Cf. G.O.Hutchinson, *Aeschylus, Seven against Thebes*, Oxford 1985, p.xxv; L.Lupaş & Z.Petre, *Commentaire aux Sept contre Thèbes d'Eschyle*, Paris 1981, p.244. なお古注には「二重の災い」(didyma kaka: 782) を，両目をつぶしたことと取る解釈もあるが無理であろう。

(44) Cf. 本章D節; Hutchinson, op.cit., pp.xxv-xxvi; Baldry, op.cit., p.31; March, op.cit., pp.140-145; D.J.Conacher, *Aeschylus. The Earlier Plays and Related Studies*, Toronto/Buffalo/London 1996, p.37.

(45) この疑問については，cf. A.Burnett, Curse and Dream in Aeschylus' Septem, *GRBS* 14 (1975), p.355, n.25; R.P.Winnington-Ingram, *Studies in Aeschylus*, Cambridge 1983, p.47; T.Gantz, *Early Greek Myth*, Baltimore/London 1993, p.505.

(46) 「狂気の錯乱」が結んだ「新婚夫婦」(nymphious: 757) は明らかに，その直前に言及されたオイディプスとイオカステを指す: Hutchinson, op.cit., ad 756f.

(47) Cf. 小川, op.cit., pp.17-18.

(48) 前者の解釈としては，Hutchinson, op.cit., pp.xxv-xxvi; Baldry op.cit., p.31, n.1; March, op.cit., p.143; Conacher, op.cit., p.58-59, n.45（ただし断定的でない）. 後者を取るのは，Lupaş & Petre, op.cit., p.245; Winnington-Ingram, op.cit. (注45参照), p.47（ただし示唆のみ）; Aélion, op.cit., p.65.

(49) 本稿ではHutchinsonの読み'athlias trophas'を取り「惨めな養い（＝子供の養育)」と訳したが，写本では'araias trophas'「呪われた養い」。「立腹した」(epikotos) という表現は，対象として何か特定の人間の言動を想起させる。

(50) Cf. Baldry, op.cit., p.32; B.Otis, The Unity of the Seven against the Thebes, *GRBS* 3 (1960), pp.157-158; Winnington-Ingram, op.cit. (注45参照), pp.26-27.

(51) 「乾いた涙なき両眼」は，H.M.Roisman (Dry Tearless Eyes, *Mnemosyne* 41 (1988), pp.27-38) によるとオイディプスの失明した眼と解されるが，筆者はエテオクレスの不屈の闘志を表現するものと見なす。

(52) Cf. Hutchinson, op.cit., ad 697; A.A.Long, Pro and Contra Fratricide－Aeschylus, Septem 653-719, in J.H.Betts, J.T.Hooker & J.R.Green (ed.), *Studies in Honour of T.B.L.Webster*, Vol.I, Bristol 1986, pp.183-184.

(53) Burnett (op.cit., pp.343-368)は，「夢」は不吉な父の呪いとは異なって，「仲裁者」による争いの解決の希望をエテオクレスに与えていたとし，この場面でその幻想が破れたことが示されると考える。しかしここでは，「夢」はけっして楽観的なものだったとは語られていない。Cf. Hutchinson, op.cit., pp. xxvii,xxix; Long, op.cit., p.189, n.22; Conacher, op.cit., p.55, n.39.

(54) この場面のエテオクレスについては，その急激な変容に注目されてきた。とくに彼は突然呪いの圧倒的な力にとらえられて我を失い，兄弟への憎悪に燃える人物に変貌するという見方が多かった (cf. M.Croiset, *Eschyle*, Paris 1928, pp.118-121; F.Solmsen, The Erinys in Aischylos' Septem, *TAPA* 68 (1937), pp.197-211; H.D.F.Kitto, Greek Tragedy, London 1961, pp.51-52)。しかし最近ではこの場面は，むしろ主人公の運命に対する自覚と主体的選択の問題として考察される傾向にある (cf. A.Lesky, Decision and Responsibility in the Tragedy of Aeschylus, *JHS* 86 (1966), p.84; Winnington-Ingram, op.cit. (注45参照), pp.35ff.; Conacher, op.cit., pp.53-54, 69-70; Long, op.cit., pp.179-189;

A.DeVito, Eteocles, Amphiaraus, and Necessity in Aeschylus' Seven against Thebes, *Hermes* 127 (1999), pp.165-171)。

(55) Cf. Hutchinson, op.cit., ad 766f.

(56) 'the ironical fulfilment of the curse' (Winnington-Ingram, op.cit. (注45参照), p.25, n.23).

(57) 以上の呪いの要素については, cf. Hutchinson, op.cit., p.xxix, p.163, ad 727-33.

(58) すなわち劇の初めから, エテオクレスは運命は避けがたいと見なしていた。Cf. DeVito, op.cit., pp.165-167.

(59) Cf. Thalmann, op.cit., pp.385-386, 390.

(60) 従来のオイディプス神話に対する『ポイニッサイ』の改変については, cf. Baldry, op.cit., pp.36-37; R.Aélion, *Euripide héritier d'Eschyle*, I, Paris 1983, pp.197-228; Aélion, op.cit. (注18参照), pp.34ff.; E.Craik, *Euripides, Phoenician Women*, Warminster 1988, pp.35-40; D.J.Mastronarde (ed.), *Euripides, Phoenissae*, Cambridge 1994, pp.17-30.

(61) エウリピデスは『ポイニッサイ』より十数年前に創作した『ヒケティデス』(前422年頃作) の149-154行において, エテオクレスが王権を, そしてポリュネイケスが財産 (khremata) を相続するという, ステシコロスとヘッラニコスが伝えたのと同じ呪いの回避法が実行されたと語っていた (cf. Gostoli, op.cit., p.27; Mastronarde, op.cit., p.27)。しかし『ポイニッサイ』では, 兄エテオクレスの非を明確にするためこの伝承は用いられなかった。

(62) ただしアイスキュロスの『テーバイを攻める七人の将軍』の場合のように強力なものとしては描かれない。Cf. Aélion, op.cit. (注60参照: *Euripide*.....), p.216.

(63) 将来のコロノスでのアテナイ人との戦いでテーバイ軍が敗北することを暗示すると解されるが (606-623行参照), 劇では具体的な事情はまったく述べられない。

(64) 1299の'ten sen Erinyn'については, 注(4)参照。

(65) Cf. 'to Perseōn kratos'「ペルシア人に対する支配 (権)」(Herod., 3.69), 'to tēs thalassēs kratos'「海の支配 (権)」(Thucyd., 1.143), 'ta astrapān krate'「雷電に対する支配力」(Soph.*O.T.*, 201)。筆者の知見の限りでは, この解釈の可能性を示唆した注釈や論考は見当たらない。

(66) あとの場面でクレオンはテーセウスに, 父殺しと母との結婚の罪で汚れたオイディプスをアテナイ人は受け入れるはずはないと言うが (944-946), 劇中でテーセウスがオイディプスの罪の汚れをまったく問題にしていないことから分かるように, 宗教的汚れに関するクレオンの主張には説得力がないものとして描かれている。同様に, 神託を伝えるイスメネからは, 親族殺しの罪は国内での埋葬禁止の理由として述べられるだけである。したがって, クレオンとの場面の前にオイディプスがテーセウスに,「父殺しゆえわたしは, 二度と帰ることができない」(600-601) と言うのは, 息子に追い出された人生 (599-600) のあと, つまり死後に故国に葬られないことを意味しているのであろう。

(67) Jebb (op.cit., ad 418f.) が指摘するように, アポロンは神託でオイディプスがテーバイの安泰を決定する者と述べたゆえに, 息子らとしては, 父の親族に対する罪は神によって許されたとテーバイ人に説くべきであった。息子たちが求めているのはただ王位のみであり, その利己的な欲求のために, 真に支配力を持つと神に告げられたオイディプスは近くに呼び寄せられるとはいえ, 国から追放されたままにされる。

(68) Winnington-Ingram (op.cit. (注3参照), pp.257-258) は, この作品における'kratos, kratein'の多用に着目し, 呪いに向かって, オイディプスの支配力と予言力が彼の人間的激情 (thymos) とともに高まっていくと指摘している。

(69) Jebb (op.cit., ad 851) とKamerbeek (op.cit., ad id.) は,「打ち負かす」とは未来のテーバイ人の敗北のことではなく, この場面の議論でクレオンが負かされたことを指すとしているが, クレオンは呪いの脅迫的内容も念頭に置いていたであろう。

(70) Wilson (op.cit., p.154-155) は, クレオンや主人公の息子たちが神託について完全な情報を持たないのに対して, オイディプスは神託によって未来について十分知っていたから呪いをかけることができたと言うが, しかし未来に関する知識は条件にすぎず, 彼らがオイディプスを怒らせたこと, つまり神託の

実現を回避しようとしたことが呪いの最大の原因になる。

(71) Cf. 'kratos: "victory", as often' (Kamerbeek, op.cit., ad 1332).

(72) Cf. Linforth, op.cit., pp.160-161; Easterling, op.cit., p.8.

(73) 岡道男(『ギリシア悲劇全集』, 岩波書店 1990, p.49, n.3, pp.330-331)は,『オイディプス王』でイオカステがライオス殺害について「三つに分かれた車道の中で (en) 殺された」(716) と言うのに対し, オイディプスが「三つに分かれた車道のそばで (pros) 殺された」(730) と言い換える点に着目し, そこに真実から逃れようとする主人公の心理を読み取ることができると指摘した(この点は, その後の論文によって詳細に考察された: 岡, op.cit. (注28参照), pp.23-29; 「『オイディプース王』716 (en), 730 (pros) に関する一考察」,『西洋古典論集』16 (1999), pp.1-8)。筆者は, 類似の意図を,「力はあなたの中に生じる」'en soi ta keinon...gignestai krate' (392) という神託に対する「力はあなたが味方する者にある」'hois an sy prosthei, toisd'...einai kratos' (1332) という言い換えに見ることができると思う。本来神託は力がオイディプスの「中」(en) に生じる(つまり彼に内在する)と告げていたのに, ポリュネイケスはそれを, 力は彼が自己をその「そばに」(pros) 置く (tithesthai) 側にある(つまり彼の外にある)と解釈しているのである。これはen soiとpros soiのような明確な形のコントラストではないが, ソポクレスが同じくenとprosの使い分けにもとづいて登場人物にもとの言葉の意味を変更させた例であり, しかもその言い換えによって登場人物はやはり真実を避けようとしている。なお故岡教授は, 筆者がこのenとprosの意図的言い換えについてご意見を伺った際, 返信(1999年9月12日付)の中で, en soi=オイディプスに「内在」, (pros) hois =彼らに「付帯的」という「力」の所有関係に関する対比がここに認められることを指摘してくださった。

(74) ポリュネイケスが, 流浪の身となって父と「同じダイモン(運命)」を共有している (1337) と言ったのに対し, オイディプスはその不遇を, 自分を不当に処遇したことへの神罰だと言い返すのである。

(75) Cf. 789-790の呪い。ソポクレスはオイディプスに息子との親子関係を否定させ, ここでアイスキュロスの「死による平等な相続」(本論第2章E節参照)のモチーフを「死という無の相続」という主人公の主張に改変したのである。

(76) 嘆願者としてのポリュネイケスについては, cf. 岡道男「嘆願劇」, 前掲書 (注28参照) 第1部第4章, pp.224-226; P.Burian, Suppliant and Saviour: Oedipus at Colonus, *Phoenix* 28 (1974), pp.408-429. しかしじつはポリュネイケスは, オイディプスを「導いて」(agon) 館に据えようと言い (1342), 彼に対して擁護者になろうとしている。

(77) Cf. Easterling, op.cit., pp.11-12.

(78) 岡, op.cit. (注28参照); 小川, op.cit.

(79) 小川, op.cit., pp.34-40.

(80) Cf. C.Calame, Mort héroïque et culte à mystère dans l'Œdipe à Colone de Sophocle, in F.Graf (ed.), *Ansichten griechischer Rituale*, Stuttgart/Leipzig 1998, pp.344-345.

(81) ただしこれは物語展開のレヴェルでの変容であって, この作品でオイディプスがダイモンに化する人物として描かれているかどうかは改めて考察されねばならない。